

文部科学省

令和5年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業（創造的教育方法実践プログラム）」

文理融合型教育による「いまりん6次化」実践プログラム

研究開発実践報告書（第1年次）



令和6年3月

佐賀県立伊万里実業高等学校

【表紙写真】

外部講師として伊万里信用金庫職員（本校 OB）によるビジネスプランの授業の様子

I はじめに

本校は、平成31年4月に伊万里農林高等学校と伊万里商業高等学校を再編統合する形で「農業」と「商業」を学べる学校として新設されました。今年で5年目を迎え、「地域と共に歩み地域産業に貢献できる人材教育」を目指し、魅力ある学校づくりに取り組んでいます。本校の特徴の一つにキャンパス制があげられます。「農業科」と「商業科」が各キャンパスで充実した専門教科を学ぶことができます。

生徒たちも新しい校風と伝統を築きながら、各々専門知識と技術の習得に励んでいます。今年度だけでも、専門を極めた技術競技、教科の強みを生かした研究発表、さらには部活動など、文武両面で素晴らしい成果を上げています。

しかしながら、部活動や行事以外では生徒間の交流も少ないため、学校運営と教育活動面で課題も残されています。

これからの時代は、自分以外（他者）と協働しながら課題を見出し、その課題解決に向けて行動し、新たな解（こたえ）を導くことのできる人材が求められています。本校の抱える課題を克服するとともに、そのような確かな能力を発揮できる学校を目指して、今年度（令和5年度）より文部科学省より「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の一つである「創造的教育実践プログラム」の指定を受けました。

具体的には、（1）Society5.0時代に対応できる人材育成（2）興味関心に応じた探究的な学びの構築と情報技術を駆使して距離的な隔たりを克服し、外部機関を巻き込んだ教育活動の導入を目指したカリキュラム開発を目指しています。

全国的にも珍しい「農業科」と「商業科」を併設するキャンパス制の専門高校である本校では、①「農業科」と「商業科」の文理融合②探究学習の導入③距離的な隔たりを克服した双方向通信と新たな交流④コンソーシアムの活用、この4つに重点を置いて研究開発を進めていきます。

今年度は手始めに、両キャンパス間で互いの学習内容に触れるところから始めました。互いの学習内容に触れることで、興味関心を高め合うと同時にそれぞれの教科の魅力や必要性を知るきっかけとなりました。さらには、コンソーシアムや同じ指定を受けた学校との交流学习にも意欲的に取り組んでくれ、確かな手応えが得られました。その一方で、両キャンパスの専門教科の狙いや文化の違いを十分に理解しないままに、文理融合を進めようとしたため、計画通りに進めることができないといった場面もありました。

次年度は、この点も考慮して軌道修正をしながら、カリキュラムの構築や探究学習を進めていく予定です。新たに予期せぬ課題に直面する可能性もありますが次へのステップと捉え精進してまいりたいと思います。また、コンソーシアムも拡大していき、外部を活用した教育活動のモデルとして佐賀県教育に貢献していきたいと考えています。

今後も魅力ある学校作りと、新たな時代で必要とされる人材育成を目指して教育活動を推進してまいりますので、ご協力をお願いいたしますとともに、今後本校生徒の益々の成長を祈念して巻頭の言葉といたします。

令和6年3月吉日

伊万里実業高等学校長 三原 聖子

【目次】

I はじめに

II 令和5年度研究開発の概要

- 1 令和5年度研究開発実施計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
 - (1) 伊万里実業高等学校を取り巻く状況の分析
 - (2) 本事業に取り組む必要性
 - (3) 本事業を実施する目的
 - (4) 創造的教育方法実践プログラムにおける目標
 - (5) 育成を目指す資質・能力
 - (6) 研究開発の実績
 - (7) 3か年の実施計画の概要
 - (8) 申請校の概要
- 2 文理融合型教育による「いまりん6次化」実践プログラムの3年間のイメージ図・・・ 7

III カリキュラム開発に係る取組の報告

- 1 外部講師を活用した課題研究の取組「ビジネスプラン」について・・・・・・・・ 8
 - (1) 課題研究「ビジネスプランコース」について
 - (2) 外部講師による指導
 - (3) 本年度の各種コンテストにおける成果
 - (4) 本年度を振り返って
 - (5) 今年度の成果と課題
- 2 キャンパス間交流学习・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
 - (1) 目的
 - (2) 実施要項
 - (3) 振り返り
- 3 課題研究発表会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
 - (1) 目的
 - (2) 実施要項
 - (3) アンケート結果
 - (4) 振り返り

IV 関係機関等との連携協力体制の構築に係る取組の報告

- 1 運営指導委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
 - (1) 運営指導委員会の設置
 - (2) 第1回運営指導委員会
 - (3) 第2回運営指導委員会

2	コーディネーターの取組について	20
	(1) コーディネーターの配置	
	(2) コーディネーターの活動	
3	コンソーシアムについて	22
	(1) コンソーシアムの構成	
	(2) コンソーシアムの活動	
4	交流事業について	34
	(1) 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校	
	(2) 久留米工業大学	
5	先進校視察報告	38
	(1) 福岡県立糸島高等学校	
	(2) 指宿市立指宿商業高等学校	
	(3) 高知市立高知商業高等学校	
	(4) 兵庫県立長田商業高等学校	
	(5) 大分県立久住高原農業高等学校	
6	全国プラットフォーム事業研修会への参加	42
	(1) 高校コーディネーター研修（第1回）	
	(2) 高校コーディネーター研修（第2回）	
	(3) 高校コーディネーター研修（第3回）	
	(4) エコシステム研究会（第1回）	
	(5) 普通科改革支援事業指定校発表会	
	(6) 高校コーディネーター研修（第4回）	
	(7) 高校コーディネーター研修（第5回）	
	(8) エコシステム研究会（第2回）	
	(9) 高校コーディネーター研修（第6回）	
	(10) 第3回高校コーディネーター研修	
	(11) 高校コーディネーター全国フォーラム	

V 次年度に向けて

1	令和5年度のまとめ	45
	(1) 目的	
	(2) 運営組織	
	(3) 文理融合型カリキュラムの検討	
2	令和6年度についての検討	46
	(1) 探究学習の導入の検討	
	(2) 令和7年度（事業指定最終年次）カリキュラムの検討	
	(3) 令和6年度の計画の内容	

VI 補足資料

II 令和5年度研究開発の概要

1 令和5年度研究開発実施計画

(1) 伊万里実業高等学校を取り巻く状況の分析

佐賀県西部に位置する伊万里市は、江戸時代には陶磁器「古伊万里」、大正～昭和初期には石炭の積出港として栄えたが、現在は伊万里湾総合開発による造船・IC・木材関連産業等の他、農畜産業が盛んである。しかし、5万人強の人口は年々減少傾向であり、産業の衰退や地域活性化等の課題も多い。また、周辺地域には高等教育機関がなく、若年者層（十代後半～三十代前半）は転出傾向が顕著である。佐賀県立伊万里実業高校は、佐賀県立高等学校再編整備により、伊万里農林高等学校（現、農林キャンパス）と伊万里商業高等学校（現、商業キャンパス）が統合され、2019年4月に、農業科及び商業科を持つ専門高校として開校した。統合後もそれぞれの校舎を使用し、農林キャンパスではフードビジネス科・生物科学科・森林環境科、商業キャンパスでは商業科・情報処理科の1学年200人(各学科40人)が学んでいる。

(2) 本事業に取り組む必要性

① 文理融合型の学科・教科等横断による継続的な専門教育の実践

本校では、特色ある教育活動として「農業科及び商業科のコラボレーション（連携・共同作業）による教育活動」を掲げ、農業科による加工品のブランド化及び商業科による販売促進活動等、体験的な教育活動を展開している。フードビジネス科では、1年次に両キャンパスで両学科の専門科目を学習し、「生産・加工・流通・販売」を一貫して学んでいる。しかし、両キャンパスの地理的隔たりも絡んで、3年間を通じての学科横断的な学習ができていない。また、商業科の生徒が農業科の専門教科を学ぶ機会はほとんどない。農産物生産・食品製造（加工）・マーケティング等において、生徒自身の専門科目を深く探究すること以外にも、オンラインを活用した校内授業参観にて他学科の学習内容を知ることや両学科で一般科目（地歴公民、数学等）を一緒に学ぶことで、多様な幅広い視点を持つことができ、課題発見・解決能力の育成に寄与することができる。

② 地域資源を活用した「6次産業化」実践に対応できる人材育成

地域に根ざした県立高校の価値向上を目的とし、農作物や加工食品等の生産・販売に留まらず、伊万里市の地域資源（陶磁器・歴史的建造物・伝統行事等）を組み合わせることで、1次産業品の付加価値向上に伴う1次産業従事者の所得向上・耕作放棄地の減少・後継者育成の他、観光促進や空き店舗対策等の身近な社会的課題を解決できる商品・サービスの企画・実践に取り組む人材を育成する必要がある。本校を農業法人組織と見立て、農業科・商業科の生徒が協働してビジネスプランを策定し、農作物や森林の栽培（1次）・食品や製材品の生産（2次）・販路開拓や販売（3次）までを生徒が実践する。ビジネスプランと収支実績を比較し、各産業の収支構造や経営課題を分析・評価・対策することで、6次産業化人材としての基礎的な知識と能力を育成できる。そして、学識経験者・実務家・行政等からの指導・助言を踏まえて、本校及び地域（地元企業）の役割分担を明確にし、本校の6次産業化人材育成カリキュラムを構築する。

③ 多様化する進路ニーズに適応した学びへの対応

従来の農業・工業・商業高校では、就職に有利な検定資格の取得に力を入れる職業教育が中心であったが、近年においては多様化する進路ニーズに適応した学びが求められている。本校の卒業生も就職5割強・進学5割弱（令和4年度実績）となっており、4年制大学や専門学校への進学を希望する生徒も多く、資格取得以外にも専門分野における学術研究に必要な基礎的知識・技術の習得やグループワーク等が求められている。そのため、遠隔・オンラインを通じた高等教育機関との連携や専門家・実務家を中心とする外部有識者からの学びは生徒のモチベーションを高める有効な手段の一つでもある。

(3) 本事業を実施する目的

佐賀県は農畜産業・窯業・製造業が盛んな地域であり、伊万里市も地域活性化に向けた6次産業化に注目し、その人材の育成にも力を入れているところである。一方、本校は農業と商業が統合された専門高校であり、地理的に隔てられた2つのキャンパスの有機的な連携に基づく、「学科・教科等横断による継続的な専門教育の推進」が課題となっている。本事業を通じて、本校生徒が「育成を目指す資質・能力」を獲得できる教育方法・カリキュラム・指導体制を構築するとともに、他都道府県の自治体や高等学校でも類似の課題を抱えていると推測できることから、佐賀県はもとより、全国の専門高校の新しい教育モデルとしての役割を果たすことを目的とする。

(4) 創造的教育方法実践プログラムにおける目標

- ① 本校を「農業法人組織」と見立て、①校内授業参観や一般科目の共同学習、②両学科協働によるビジネスプラン策定、③各学科の専門教育の実践（生産・加工・販売等）を通じた文理融合型の学科・教科等横断による「6次産業化人材の育成」に資するカリキュラムを開発する。
- ② オンライン型ビジネス教育教材を活用して、6次産業化を実践するための商品企画・マーケティング・収支計画に基づくビジネスプランを策定する。
- ③ オンラインを活用して、高大連携による大学訪問・講義受講・メタバース体験・大学生との協働PBL等に取り組み、専門的な教育を受けられる機会を設ける。

(5) 育成を目指す資質・能力

1次産業従事者の後継者育成や観光促進等の社会的課題解決に両学科が協働で取り組むことで、従来の活動範囲（学校）や知識範囲（教科書）を超えて、地域（地元住民・企業・行政等）との実践的な連携（ビジネス）を通じて、「6次産業化人材の育成」で、特に重要な「課題発見・課題解決能力」・「他者との協働・コミュニケーション能力」・「リーダーシップ力」を育成する。

① 課題発見・課題解決能力

6次産業化（生産・加工・販売）を学ぶ過程で、消費者ニーズを満たす商品・サービスを企画し、ビジネスモデル（儲かる仕組み）とマーケティング（売れる仕組み）を客観的（数值的）根拠及び論理的思考に基づき熟考しなければならない。試行錯誤を繰り返すことで身につく能力である。

② 他者との協働・コミュニケーション力

他者の多様な意見・考え方を尊重し認めながらも、他者との意思疎通を意識的に図り、双方の目的達成のために他者と協力する能力である。

③ リーダーシップ力

チームの指導者として率先して行動し、メンバーを統率しつつ、メンバーのモチベーションを維持・高める能力である。

育成する資質・能力	具体的なスキル
課題発見・課題解決力	a) さまざまなデータや資料から現状を分析し、問題点を把握する力 b) 問題点から課題を抽出し、課題解決に向かうプロセスを企画する力 c) ビジネスモデル及びマーケティング戦略を立案できる力
他者との協働 ・コミュニケーション力	a) あらゆる他者の考えを尊重し認める力 b) 他者との意思疎通をスムーズに行う力 c) 課題解決に向けて他者と協力して解決しようとする力
リーダーシップ力	a) チームの指導者として率先して行動し、メンバーを統率できる力 b) メンバーのモチベーションを高める力

(6) 研究開発の実績

① 佐賀県教育委員会における研究開発の実績

a 文部科学省「スーパーグローバルハイスクール (SGH)」事業

- ・実施期間：平成 28 年度～令和 2 年度
- ・実施対象校：佐賀県立佐賀農業高等学校
- ・管理機関としての関わり
 - a) 運営指導委員会では、円滑かつ効果的な事業推進のための指導助言
 - b) 英語教員、ALT の配置等や体験的英語活動の支援
 - c) 海外研修への支援（教育振興課）
 - d) ICT 利活用教育における支援
 - e) 成果普及のための取組（県主催の教育課程講習会等）

b 道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業

- ・実施期間：平成 26 年度から単年度契約で毎年 ※令和 2 年度のみ事業なし
- ・実施状況：H26～H31 まで県内 1 中、1 小 R3～R4：義務教育学校 1 校
- ・管理機関としての関わり
 - a) 指定校に対する指導・助言
 - b) 実施計画の作成支援
 - c) 進捗状況の管理報告書作成の支援

② 伊万里実業高等学校（フードプロジェクト部）の研究開発の実績

- ・第 69 回佐賀県学校農業クラブ連盟大会（発表の部）
プロジェクト発表 最優秀 令和元年 6 月

- 意見発表 最優秀 令和元年 6月
- ・ 第62回九州学校農業クラブ連盟発表大会
 - プロジェクト発表 最優秀 令和元年 8月
 - 意見発表 最優秀 令和元年 8月
- ・ 全国高校生マイプロジェクトアワード九州サミット
 - 最終審査出場 令和2年 2月
- ・ 海とニッポンプロジェクト スポGOMI 甲子園
 - 第3位 令和2年 9月
- ・ 毎日農業記録賞
 - 佐賀支局長賞 令和2年11月
- ・ エシカル甲子園2020
 - 奨励賞 令和3年 3月
- ・ 第5回高校生が描く「明日の農業コンテスト」
 - 銀賞 令和3年 6月
- ・ 第64回九州学校農業クラブ連盟発表大会
 - プロジェクト発表 優秀賞 令和3年 8月
- ・ 農業のレポートコンテスト
 - 教育長表彰 令和3年11月
- ・ ディスカバー農山漁村の宝（第8回選定）
 - 全国選定 令和3年12月
- ・ 佐賀県学校農業クラブ連盟大会大会（発表の部）
 - 最優秀賞 令和4年 6月
- ・ 第7回全国高校生SBP交流フェア
 - 特別賞 令和4年 7月
- ・ 第11回イオンエコワングランプリ
 - 文部科学大臣賞 令和4年12月

(7) 3か年の実施計画の概要

① 令和5年度

- a 文理融合型の学科・教科等横断による「6次産業化人材育成カリキュラム」の開発
 - ・ 農林キャンパス（農業科）及び商業キャンパス（商業科）の両キャンパスにおいて、本校校長をトップとする運営委員会を編成する。「6次産業化人材育成フレームワーク」に基づく共通学習・重点学習・協働学習の在り方や実施方法等について協議・検討し、農業科及び商業科の総合実習や課題研究として単元の内容や配列を工夫して、単元配列表を作成する。当該年度は3年生を対象とするが、段階的に1、2年生においても、統計的知見やグローバルなコミュニケーション能力の育成を図るとともに伊万里の地形や産業等について学習する機会を設け、6次産業化人材に必要なスキルアップを図る（教科横断型）。
 - ・ 総合的な学習（探究）活動において、高等教育機関や外部有識者の遠隔講義を実施し、円滑な遠隔授業の準備や運用方法等を評価・改善する。コーディネーター・大学教授

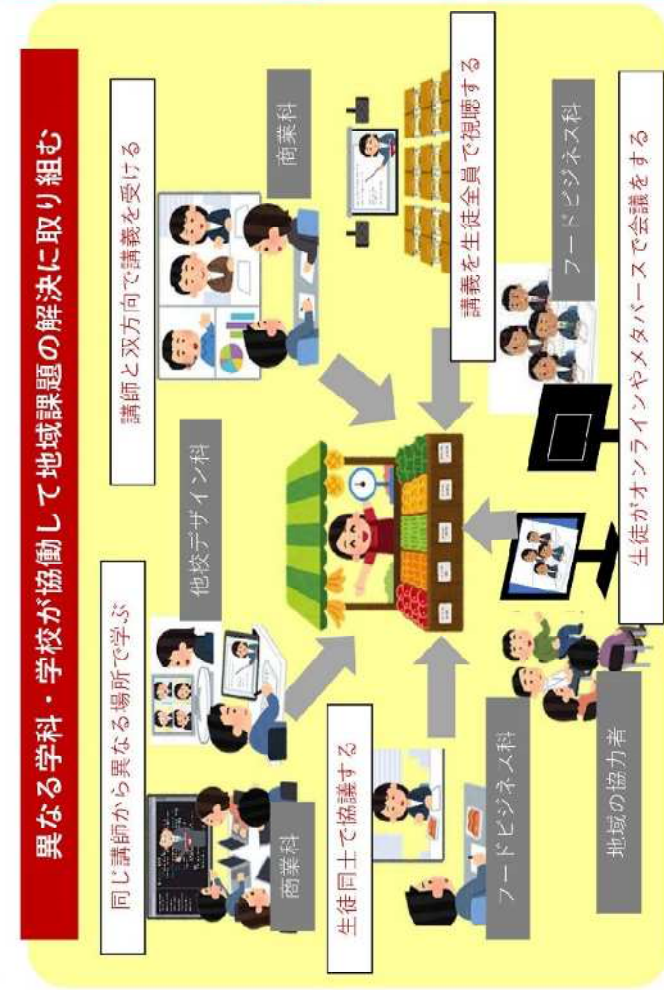
- 2名・コンソーシアム構成員2名からは、企業経営や AI、菓子を通じた地域活性化、陶磁器の歴史・文化、6次産業化の実践例等について講演をいただく。
- ・オンライン教材（経営マネジメント）を用いた学習を試行的に実施し、生徒の学習意欲や理解度のほか、観点別学習状況の評価（①知識・技術、②思考・判断・表現、③主体的に学習に取り組む態度）を支援する仕組みについて評価・改善する。
 - ・カリキュラムの作成に際しては、学習科目や単元配列表の作成を目的とするのではなく、生徒の興味・関心や地域課題への貢献等を考慮して、生徒が自発的に学習に取り組むことができるように、コンソーシアムの構成員から指導・助言をいただく。
 - ・本事業の他の指定校を視察し、活動内容を共有することで、本校の活動に活かす。
- b 協力校の募集
- ・本事業の成果を普及するために、地域課題に取り組んでいる学校のうち2校程度を協力校とする。伊万里市周辺地域から1校、佐賀県下から1校を想定する。
- ② 令和6年度
- a 「6次産業化人材育成カリキュラム」の実践・評価・改善
- ・2年生における「農業科及び商業科のコラボレーション授業」の実現に向けた調整を実施して、2年生及び3年生双方の学科横断的な単元配列表を作成する。
 - ・当該カリキュラムを実践し、年度末に生徒及び教員による評価をもとに改善を図る。
- b 他県の指定校及び協力校との交流・連携
- ・指定校及び協力校の生徒との交流を促進し、活動報告会を開催する。
- ③ 令和7年度
- a 学校横断による「6次産業化人材育成カリキュラム」の有効性評価
- ・本校以外にも、6次産業化ビジネスプランの策定や地域課題の解決に取り組んでいる他の高等学校とも連携し、学校横断による当該カリキュラムの有効性を評価する。
- b 他県の指定校及び協力校との交流・連携
- ・本校の活動結果を報告し、他校との定期的な活動を継続する仕組みを構築する。
- c 本事業終了後の取組継続のための体制整備
- ・本校内の体制を維持し、カリキュラムの再評価や情報公開を継続する。

(8) 申請校の概要

新時代に対応した高等学校改革推進事業（創造的教育方法実践プログラム）

ふりがな	いまりじつぎょうこうとうがっこう				②所在都道府県	佐賀県
①学校名	伊万里実業高等学校				③設置形態	公立
					④課程別	全日制
					⑦教職員数	
⑤生徒数	1年	2年	3年	計	教員数：53 職員数：7	
生物科学科	40	31	38	109		
森林環境科	25	13	17	55		
フードビジネス科	40	38	37	115		
商業科	40	40	39	119		
情報処理科	40	40	39	119		
計	185	162	170	517		
⑥学級数	1年	2年	3年	計		
生物科学科	1	1	1	3		
森林環境科	1	1	1	3		
フードビジネス科	1	1	1	3		
商業科	1	1	1	3		
情報処理科	1	1	1	3		
計	5	5	5	15		
⑧構想名	文理融合型教育による「いまりん6次化」実践プログラム					
⑨構想の概要	多様で幅広い視点を持ち、課題解決に向け能力を発揮できる人材を育成することを目的に、地域課題の解決に向けて異なる学科・学校がそれぞれの専門性を活かした文理融合型の学びを実践するカリキュラム開発を行う。また、デジタル技術を活用して、専門的知見や先端技術を有する人材や地域人材による質の高い教育や生徒間の協働的な学びを時間的・空間的な制限を超えて実践する。					
⑩その他学校の特徴	本校は、佐賀県立高等学校再編整備により、伊万里農林高等学校と伊万里商業高等学校が統合され、2019年4月に、農業及び商業を学ぶ実業系の高等学校として開校した。 本校では特色ある教育活動として「農業科及び商業科のコラボレーション(連携・共同作業)による教育活動」を掲げ、両科による商品の共同開発のほか、農業科による加工品のブランド化及び商業科による販売促進活動等、体験的な教育活動を展開している。					

【佐賀県立伊万里実業高等学校】文理融合型教育による「いまりん6次化」実践プログラム



背景

- 文理融合型の学科・教科等横断による継続的な専門教育が必要
- 地域資源を活用した「6次産業化」を実践できる人材育成が必要
- 多様化する進路ニーズに適応した学び

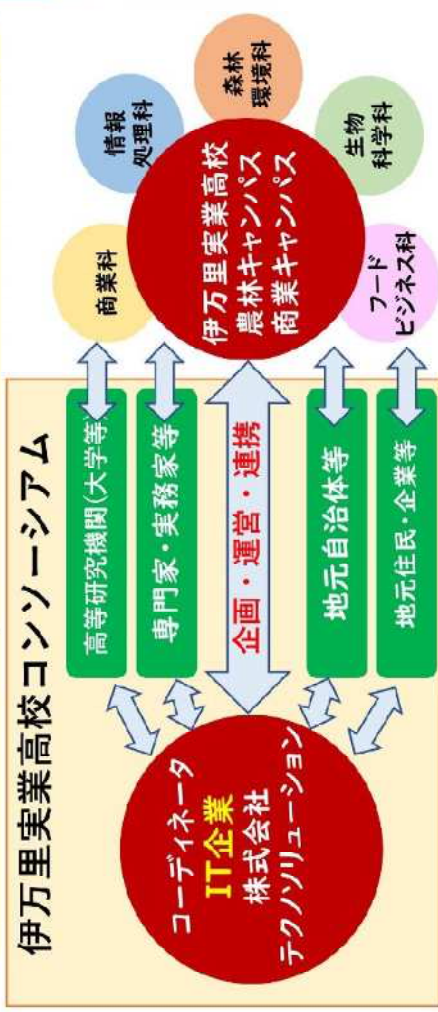
目的

6次産業化人材を育む学科・教科等横断による継続的な専門教育を推進する実業系高等学校の新しい教育モデルの確立と普及

方法

【6次産業化人材育成フレームワークの導入】

- ①遠隔授業・オンライン教材等による共通（一般/専門科目）・重点・協働学習の推進
- ②フレームワークの基盤部分の汎用化及び地域特性部分の専門化による教育モデルの普及



	令和5年度	令和6年度	令和7年度
カリキュラム開発	学科・教科等横断による共通・重点・協働学習の体系化とカリキュラムの開発	6次産業化人材育成カリキュラムの実践・評価・改善	6次産業化ビジネスプランや地域課題の解決に向けた学校横断による協働学習の有効性評価
成果書及	伊万里市周辺及び佐賀県下からの協力校募集	協力校及び他県の指定校との交流や学会発表、ホームページ掲載等による活動実績の公表	県内高等学校への事例紹介やカリキュラムの導入支援、高等教育機関等との協定締結

Ⅲ カリキュラム開発に係る取組の報告

1 外部講師を活用した課題研究の取組「ビジネスプラン」

伊万里実業高等学校 教諭 金崎 洋介

(1) 課題研究「ビジネスプランコース」について

① コース概要

本コースは、本校商業キャンパス3年生2クラスの選択授業として展開している課題研究の一つのコースである。他にも商業デザインコース・プログラミングコース・会計ビジネスコースがあり、本コースは開設4年目となる。本年度は、18名の生徒が本コース選択をしている。

開設のきっかけは、中小企業庁主催「起業家プログラム実施支援事業」への参加であり開設2年目までは、複数の外部講師の協力のもと、本校職員がメインで運営してきた。開設3年目より、コーディネーターである坂口氏のサポートによる授業展開を開始し、本年度で2年目となる。

② コースの目的

コースの主な目的は、1、2年次に学んだ商業科目である簿記やマーケティング、情報処理などを総合的・実践的に活用し、専門科目の理解を深め、生徒たちが自分たちで考え主体的に学習することで、将来に役立つスキルを身につけることとしている。

③ コースの授業内容

コースの主な授業内容は、マーケティング、ビジネスアイデアの立案、ビジネスプランの作成、プレゼン資料の作成および発表、コンテストへの参加などを年間計画としてあげている。コンテストへの参加はあくまでも生徒の目標を明確にするために取り入れており、本コースのメインとしては位置づけていない。

(2) 外部講師による指導

① 外部講師依頼の動機

本事業のコーディネーターも兼ねていただいている坂口氏には、昨年度より年間をとおして本コースの外部講師として担当していただくこととなった。これまでも、いろんな授業で外部講師による授業展開を実施してきたが、単発的な外部講師による授業は、刺激にもなり生徒たちへの意識付けとしては効果があるものの、生徒が講義後も学習した内容や考え方を持続することが難しく、一時的なものになるというマイナスの経験から、年単位でお願いできる方を探していた。そのような時に、本校の趣旨をご理解いただき積極的にご協力いただけるということで坂口氏に担当していただくこととなり、生徒と地域社会との接点を増やし、生徒が提案するビジネスプランをとおして、地域社会に貢献できる人材教育を目指すことを目的に授業を開始した。

② 授業の様子

令和4年度の授業では、年間をとおしてほとんどがオンライン授業であったが、これまでの反省から令和5年度は5時間程度、本校で直接指導をしていただいた。令和4年度までの取り組みの中で、生徒の状況に応じて授業計画を変更していく場面も見られたが、授業後の坂口氏と本校職員との打ち合わせを何度も繰り返すことで充実した内容になってい

った。生徒たちの授業に対する姿勢については、年度当初から教科書では学べない内容を毎時間聞くことができるため、刺激にもなり積極的に取り組む様子がみられた。また、簿記やマーケティングなど、商業科目の大切さについて授業の中で話していただくことで、本コース設定の意義がはっきりとした。

令和5年度は、昨年度以上に年間計画に時間をかけて設定し、授業内容のさらなるレベルアップを目指して、綿密に打ち合わせを行った。年度初めのオリエンテーションで生徒に対し、本コースの目標・意義をしっかりと理解させ、授業に集中できるような環境作りを心掛けた。本年度の大きな特徴としては、本コースのような教科書のない授業において、基礎知識や授業に対するモチベーションの低い生徒が方向性を見失って、初期段階で苦手意識をもたないように、まずはしっかりマーケティングやビジネスモデルに関する周辺知識やビジネスプランの考え方の基礎を定着させるために、導入段階からケーススタディを取り入れて、生徒に徹底的に考えさせ、人前で整理した内容を理論的に説明する機会を設けていただいた。ここで使用された教材は、坂口氏が作成された「Think Base」という教材で、高校生が使用するケースの内容として、適度なボリュームで充実した内容になっている。また、本教材にはゲーム教材が付属されており、ケースの中に登場する企業や周辺の街、利害関係者等がゲームに登場し、このゲームを使用することでケースにない追加情報を収集することが可能となる。生徒は、ケースの文章・グラフとゲームの両方を活用することで、ケースの背景を整理・分析し、積極的に課題に取り組むことができる。生徒たちが楽しみながら主体的に学んでいくなかで、ビジネスプラン作成における知識を身につけ、ケース課題の発表をする生徒の様子から、本教材の高い効果が得られることがうかがえる。

本年度は、複数のビジネスプラン関連のコンテストへの応募を希望する生徒に対して夏季の集中特課を計画していただいた。夏季休業中5日間の午後を利用しての坂口氏による講座が開かれた。参加生徒は2名ではあったが、いずれもやる気をもった生徒であり、授業以上の高いレベルで手厚いご指導をいただき、次のような成果を上げることができた。

(3) 本年度の各種コンテストにおける成果

- ① 第33回全国産業教育フェア福井大会 高校生ビジネスアイデアコンテスト
優秀賞 1名
- ② 日本政策金融公庫 ビジネスプラン・グランプリ
ベスト100 1名
- ③ 佐世保STARTUP99
優秀賞 1名

(4) 本年度を振り返って

坂口氏に外部講師としてご指導していただいて本年度で2年目を迎えるが、特に本年度は、本校生徒のレベルに合った内容でご指導をいただき、生徒たちも楽しく積極的に取り組めたと考える。現在も多方面にわたりビジネスの現場に携わっておられる坂口氏だからこそ実践的な知識やスキルを必要とする本コースに適した授業を実施していただいたと実感している。さらに特筆すべきことは、本授業の目的をご理解いただき、生徒たちに商業科目の必要性を

機会あるごとにご説明いただき、生徒がこれまで学習してきた専門科目の必要性を理解した上で授業を進めることができたことに大変意義深いと考える。

今後とも坂口氏にご協力をいただき、本コースのさらなる向上と生徒たちのレベルアップを期待する。

(5) 今年度の成果と課題

外部講師を活用した課題研究の取組「ビジネスプラン」の効果は大きかった。オンラインを活用することで、年間を通して専門知識をもった講師による指導が可能となった。そのことにより、ビジネスプランの立案に関しても段階的に指導を受けることができ、内容の深いものが作成できた。課題としては、講師の旅費はオンラインによる講義のため必要ではないが、謝金は必要となる。研究を進める一方で、継続した取り組みとするためには、予算等検討する必要がある。



図1 オンライン授業の様子



図2 伊万里市長への受賞報告

2 キャンパス間交流学习

(1) 目的

「農業科」と「商業科」の生徒が互いに相手のキャンパスに移動して交流学习を体験することで、それぞれのキャンパスの学びを理解するとともに、それぞれの専門学習に興味関心を高める。

(2) 実施要項

対象学年：1年生

実施方法：それぞれの学ぶ専門授業についてお互いに教え合う

① 商業キャンパス（商業科）

日 程 令和5年10月3日（木）

時 間 13:55～15:40 交流学习（2班に分けて各学科を回る）

① 13:55～14:45

② 14:55～15:45

内 容 商業科：簿記
情報処理科：Excel

② 農林キャンパス（農業科）

日 程 令和5年10月4日（水）

時 間 13:55～15:40 交流学习（3班に分けて各学科をローテーション）

① 13:55～14:30

② 14:30～15:05

③ 15:05～15:40

内 容 生物科学科：栽培実習（栽培管理を体験する）
森林環境科：測量「水準測量」（オートレベルを用いた高低差測量）
フードビジネス科：食品化学実験（アルギン酸ビーズづくり）

(4) 振り返り

同じ学校でありながら離れたキャンパスで学ぶため、お互いがどのような専門学習を実施しているのかを知る機会がなかった。今回のプログラムでは、本校の強みとなる農業と商業の学びあいを目的としている。そのためにも1年次にお互いのキャンパスを訪れて、実際の学習内容を体験できたことは、次年度以降に向けて大きな一歩となった。生徒の感想文にも「どのような学習をしているか知れたので、興味がわいた。」「もっと交流を深めたい。」といった意見が多くみられた。担当した教員からも「楽しく交流する生徒の姿を見て、交流学习を実施してよかった。」という意見をいただいた。次年度以降も継続実施する予定である。



図3 生物科学科生徒が簿記を習う様子



図4 商業科生徒が測量を習う様子

3 課題研究発表会

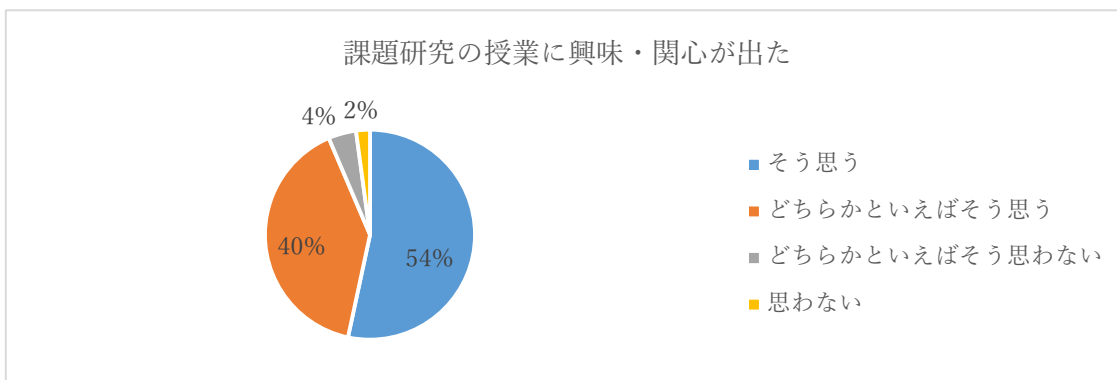
(1) 目的

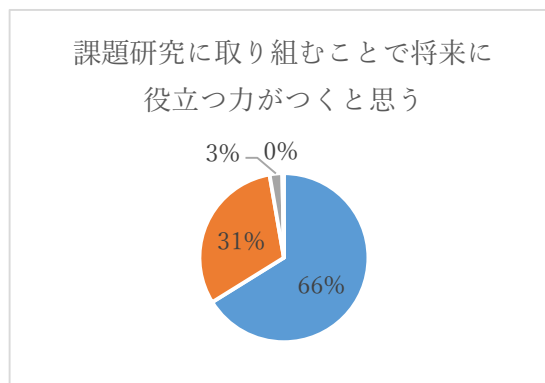
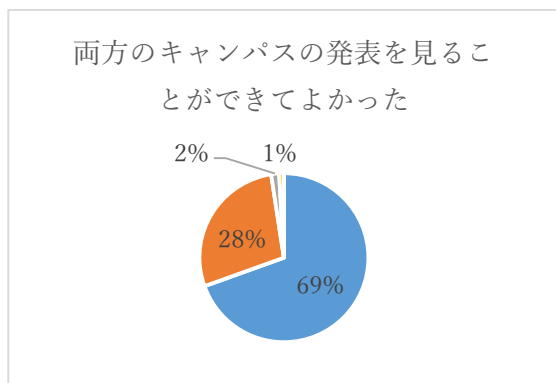
農業及び商業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行う課題研究の成果を発表することによって、農業と商業を学んだ生徒同士の学び合いを目指す。

(2) 実施要項

期 日	令和6年2月8日(木)
場 所	佐賀県立伊万里実業高等学校農林キャンパス 体育館
参加者	農林キャンパス生徒及び商業キャンパス3年生は体育館で参加 商業キャンパス1、2年生は商業キャンパス教室でオンライン視聴
内 容	
	8:50 生徒着席
	9:00～ 9:10 開会
	1 学校長挨拶
	2 発表方法の説明
	9:15～10:55 発表(休憩時間10分含む)
	1 「ビジネスプラン研究」
	2 「梨のドローン溶液受粉技術の確立 ～伊万里の梨栽培に新たな風を～」
	3 「商業デザイン研究」
	4 「イマりに光を灯そう ～木の可能性は無限大!～」
	5 「プログラミング講座」
	6 「伊万里の魅力を発信! フードマップ作成」
	7 「会計ビジネスの1年間の取り組み」
	8 「地域で創る伊万里 サステナブルシティ計画」
	10:55～11:00 閉会
	1 講評 佐賀大学教育学部長 小野 文慈 様

(3) アンケート結果(1、2年生実施)





(4) 振り返り

1、2年生の感想には「3年生の専門性の高い研究内容に驚き、3年生に向けて専門学習への取り組みを改めなければいけない。」「3年生になったら地域に貢献できる研究に取り組みたい。」といった声が多く聞かれた。また、「農業科」と「商業科」の両方の発表を見られたおかげで、知らない分野のことについて興味がわいたという声も多かった。このような意識をもった生徒が来年度の課題研究発表会に向けて取り組むことで、よりレベルの高い発表会になることが期待できる。

ただし今回の課題研究発表会では、本事業を遂行するにあたり大きな問題と考える点が浮き彫りとなった。課題研究の内容を「調査・研究・実験」とするのか「作品製作等」とするのか、それぞれのキャンパスで課題研究の捉え方が全く異なっていることがわかった。しかし、本事業が目標とする生徒の育成には探究活動が欠かせない。そのため、1、2年生の総合的な探究の時間から3年生の課題研究まで、3年間を見通した探究学習をカリキュラムに導入したいと考えている。このカリキュラム導入のために、次年度は試行として1、2年生の時間外に総合的な探究の時間を導入して探究活動を進めることで、職員の意識を高め「文」「理」融合の手立てを模索し続けたい。



図5 発表の様子



図6 佐賀大学の小野先生による講評

IV 関係機関等との連携協力体制の構築に係る取組の報告

1 運営指導委員会

(1) 運営指導委員会の設置

① 運営指導委員会の制定

伊万里実業高等学校における新時代に対応した高等学校改革推進事業の運営に関し、専門的見地から指導及び助言、評価を行う機関として、運営指導委員会を設置した。

② 運営指導委員の任命及び委嘱

管理機関である佐賀県教育委員会より委嘱及び任命を行った。期間については令和5年7月11日から令和6年3月31日までとした。

③ 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
佐賀大学教育学部学部長	小野 文慈	佐賀県のICT活用教育改善検討委員会委員や高校生によるプレゼンテーション大会審査員を務めている。
伊万里市教育委員会 学校教育課長	杉原 世紀	元伊万里市立立花小学校長であり、伊万里市の学校教育だけでなく、行政とのつながりも期待できる。
佐賀県立鳥栖商業高等学校 校長	池田 勝	前伊万里実業高等学校長であり、これまでの取組を熟知している。開発プログラムの横展開を進める上でのアドバイスを期待できる。
佐賀県教育センター所長	馬場 光弘	元佐賀県立有田工業高等学校教頭、高校生の様々な取組に精通しており、地域連携等への実績例を提供できる。
佐賀県教育委員会事務局 教育振興課 指導主事	細國 真紀	佐賀県立高等学校の「唯一無二の学校づくり」担当であり、県内高等学校の特色を生かした取組や地域との協働による取組などを推進している。

④ 運営指導委員会が取り組む内容

運営指導委員会は、定期委員会として年2回開催する。

・第1回 8月（年間計画及び事業内容の確認）

本校からの報告を受け、事業計画・実施体制・実施方法等について専門的見地から指導・助言を行う。課題等がある際にはその解決策等を協議し、アドバイスする。

・第2回 2月（実施報告、次年度計画の確認）

成果検証の結果と学校の事業報告を受け、専門的見地から指導・助言を行う。さらに、次年度の事業の改善・充実に向けたアドバイスを行う。

(2) 第1回運営指導委員会

日時 令和5年8月31日(木) 10:00～11:30
場所 佐賀県立伊万里実業高等学校 商業キャンパス 会議室
参加者 運営指導委員
小野 文慈 氏、池田 勝 氏、馬場 光弘 氏、細國 真紀 氏
管理機関
石津 扶美子 氏、岩谷 祥史 氏
学校職員
(校長) 三原 聖子、(副校長) 中島 淳、北村 昭彦、
(事務長) 江頭 誠治、(主幹教諭) 世戸 直明
コーディネーター
坂口 憲一 氏(オンライン参加)
【別日(8月3日)に実施】
運営指導委員 杉原 世紀 氏

内容

学校長挨拶

近年、少子化による人材不足が課題となり、日本の産業教育のあり方が見直されています。実際、昨年度から新学習指導要領に順次移行し、専門高校においても主体的・協働的な学習の学びと自ら課題に向き合い、論理的に課題を解決する能力の育成が求められています。

本校は農業と商業の専門的な技術を学べる学校です。この長所を生かしながら、本事業を通して新しい教育方法を模索して、全国の学校に対してモデルケースとして発信していきたいと思っています。指定は3年間ですが、年度ごとに更新が必要です。運営指導委員としてご協力いただき皆様の貴重なご意見を参考に、3年間で魅力ある学校づくりとカリキュラム開発に取り組みたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

指導及び助言等

【小野 文慈 氏】

大学においても他校と連携したプログラムの作成が求められています。その場合、教科を何にするかが問題となります。しかし、伊万里実業高校はキャンパス制であっても1つの高校なので、本事業の目指すところが先生方に理解してもらうことができれば、大学と比較して、かなりやりやすい環境だと思います。

佐賀大学でも他大学と学部をつながりやろうとしています。こちらの取り組みが私たちの大学においても良いモデルになると考えており、一緒に取り組んでいきたいと思っています。

本事業の遂行はかなり大変だと思いますが、3年間しっかりと見守らせていただきたいと思っています。

【池田 勝 氏】

1年目は苦労があるかと思っています。何事もそうですが、最初の動き出しにはとて

もエネルギーが必要です。2、3年目は、目標が見え始めれば動き出すと思います。

6次産業化をキーワードに、本事業で取り組めると思う内容を整理してみると、学校単体ではもったいないと思う学びが、この学校にはたくさんあります。農林高校も商業高校もどちらも100周年を超える伝統ある学校です。そのような学校が一緒になると、化学反応が起こってくると思います。1+1が3以上になると思います。この事業での取り組みは、そのような活性のきっかけになると思います。

新しい学びの形をつくるには、1年目に、カリキュラムをはじめ筋道作りが大切だと思います。ここをしっかりと作り上げれば、2、3年目にしっかりと走っていけると思います。

本事業の中にぜひ入れてほしいのが新たな学びとしてのツールです。メタバースや遠隔操作はもちろんですが、ビジネスツールやゲーム（佐賀新聞の8/21にも人気ゲーム「桃鉄」を活用し学習意欲を引き出すといった記事が掲載されていたかと思います）などです。子どもたちの学びには、興味関心が第一だと思っています。この興味関心が十分に喚起できると、その後は生徒が自主的、主体的な学びへとつながっていくことにつながると思っています。

また、学校はどうしても閉鎖的で、井の中の蛙の状態になりやすいものです。ここに計画されているコンソーシアムによって、学校内だけでは引き出せない魅力が見つかり、関係機関や関係者に力を借りながら、協働によって伊万里に必要な、伊万里になくてはならない学校となると思います。

そして、この取り組みが終わったときに、しっかりとしたベースを残していただければ、先生方が入れ替わったとしても、この学校にノウハウが残り、さらには他の地区や学校のモデルとして継続していくと思っています。1年目が大変だと思いますが、頑張ってください。

【馬場 光弘 氏】

地域に愛される学校、地域に必要とされる学校とはどういうことをすべきかを考えることが大切だと思います。それによって中学生がこの学校に来たいと思える学校となると思います。そのためには生徒に活気がある学校となるべきです。これには子どもたちが自主的に活動できる環境づくりが理想だと思います。私の前任校である有田工業では、生徒会活動や地域ボランティアへの参加、インターンシップや部活動などの取り組みです。これにより地域に必要な学校だという認識を高めていきました。そして大きかったのは甲子園に出場したことです。これによってやっぱり有田には有田工業高校が必要だと感じてもらいました。

この事業ではカリキュラムの変更も必要になるかと思っています。しかし、カリキュラムを変えらるとなると、各教科の先生方が自分たちの教科が削られると思うかもしれません。しかし、子どもたちが学びたい学校を目指すと言う目標が大切だと思います。

【杉原 世紀 氏】

フードプロジェクトの取組では、まさしく伊万里実業高等学校のよさである農業科と商業科との連携・共同作業による特色のある教育活動が展開されていて、本当に素晴らしい取組だと思っています。今後は、フードプロジェクトだけでなく、同

様の取組がいろいろ出てくるだろうと、わくわくしています。

他の運営指導委員さん方からも出ておりましたが、本事業の目標を明確にし、全教職員、そして生徒、地域の方々などとその目標を共有しながら、同じベクトルで進めていただけたらと思っています。そして、ぜひ、地域に貢献できる力を身につけた生徒が増え、この「伊万里のよさ」に気付き、伊万里に戻ってくるような人がどんどん増えていったらいいなと思っています。そのためにも、生徒にとっても、先生方にとっても楽しくてやりがいのある取組を行っていただければと思っています。

【細國 真紀 氏】

この事業の計画を聞いて、新しい時代の教育に進んでいくのだと思いました。担当している事業も魅力的なカリキュラム開発に取り組んでいます。そのためには学校の中だけではダメで、地域の方の協力が必要となってきます。普通科改革に求められる探究の学習ですが、鹿島高校や唐津西高校が地域の方々を巻き込んで、活発に取り組んでいます。唐津西高校では、コンソーシアムと同じような組織としてコミュニティースクール委員会のメンバーを講師として招き、ゼミ形式に探究活動が計画されています。鹿島高校でも同じように地域の方々に来ていただき、職業について講話をいただくことで、進路選択の参考にもなると伺っています。

大変だと思いますが、私たちが担当するスマートラーニング事業にもこちらの学校は参加をいただいています。こちらの事業とうまく融合して、目標が達成されれば良いと思います。

【石津 扶美子 氏】

評価に関しては、これから管理機関として学校と連携をして取り組んでいきます。

事業計画については、フードプロジェクトの成功例を学校全体に広げていきたいということで、それが実現できれば本当に素晴らしいことだと思います。その中でカリキュラムについてですが、本年度の提出については締め切られていますが、変更も可能かと思っています。このままでは事業の3年目にカリキュラムの変更となり、カリキュラムの評価及び改善ができないかと思っています。できるだけ2年目から導入できる方向で動いてほしいと思っています。私自身も鳥栖商業で2年生から総合的な探究の時間を導入し、探究学習を計画しましたが、カリキュラムを削って導入することに、先生方の理解を得ることに大変苦労しました。しかし、先ほど先生が説明されたように、この事業の目標をしっかりと明確に示せば、先生方にも理解が得られると思っています。

【坂口 憲一 氏】

この事業は学校の中だけではダメだと思っています。6次産業化ということで、企業や地域とうまく組み合わせることが非常に重要だと思っています。伊万里市もその点を強く望んでいます。今後は、このコンソーシアムを有効的に、かつ現実的に活動させていくために、企業や地域の方をどんどん巻き込んでやっていきたいと思っています。私もいろんなアイデアを持っています。本当にびっくりするようなアイデアも持っています。伊万里実業高校でしか学べない、絶対に他の学校では学べないようなアイデアを持っています。ぜひそのアイデアを先生方とも話し合っ

生徒にとって楽しい、この学校でしか学べないと思うような取り組みを行っていき
たいと思います。

まとめ

指導助言を受け、①カリキュラムの検討、②他校との交流についても取り組むこと
とした。

(3) 第2回運営指導委員会

日 時 令和6年2月8日(木) 11:30～12:30
場 所 佐賀県立伊万里実業高等学校 農林キャンパス 視聴覚室
参加者 運営指導委員
小野 文慈 氏、杉原 世紀 氏、馬場 光弘 氏、細國 真紀 氏
管理機関
岩谷 祥史 氏
学校職員
(校長) 三原 聖子、(副校長) 中島 淳、北村 昭彦、
(事務長) 江頭 誠治、(主幹教諭) 世戸 直明
コーディネーター
坂口 憲一 氏

内容

学校長挨拶

今回は、第1期の事業内容についてご審議いただきます。6月から本格的に動き出
し、手探り状態でやっているため、いろいろと至らない点もあるかと思いますが、今
年度、本校で取り組めた内容について、次年度に向かってご助言いただきたいと思
います。また佐賀大学の小野様からの講評で、文理融合という言葉が出て安心してい
ます。その部分が今年度は弱かったと思って悩んでいましたが、今回の発表会が文理融
合の第1歩になったと思います。本日は私たちが気づけないところをご指導いただき
たいと思います。よろしく申し上げます。

指導及び助言等

【小野 文慈 氏】

この事業を実施したことによって、生徒たちの意識がどう変わったかということ
を出力できないかと思います。例えば、伊万里市では、人口減少が課題となってい
ると思うが、1年生が入学した時点で伊万里に就職したいと考えている生徒の割合
を把握し、それがこの学校で学んだ3年間でどのように変化をするのかを調査する
ことで、この事業の結果として見えてくるのではないかと考えています。伊万里の
ことをよく知ると、伊万里のために何かやろうという気持ちが出てくるという関連
性が、この事業の効果の表れではないかと思います。

【杉原 世紀 氏】

私自身が小学校の教員をしており、その目線から意見を述べさせていただきたいと思えます。今日の課題研究発表会はとても楽しかったです。高校生目線からのいろいろな取り組みがあり、興味深く見させていただきました。実は、私は小学生の発表も好きです。小学生の発表は完璧ではないところ、将来性が期待できるところが良いと思えます。高校生の発表も完璧ではないところが魅力になります。

さて、小学校でこのような活動を実施するときは、意欲を大切にします。例えば、活動を1年間継続させようとしても、小学生は意欲が継続しません。そこで、小学校では途中に変化を与えます。例えば、他者から意見をいただく中間評価を入れたりします。今日、坂口さんからの質問にあったように、クーポン券を入れるといった意見はまさに変化にあたるもので、「このようにしたらもっと良くなるのではないか」といった意見により意欲が少し下がっていた生徒も、意欲がつながっていくと思えます。中間評価において他者の意見を聞くことは、この事業で育成を目指している「他者との協働」や「コミュニケーション力」を高めることにもなると思えます。また、課題研究発表会がゴールになって欲しくないと思えます。発表の中に「後輩に引き継いでいく」「私たちの挑戦は続いていきます」という言葉がありましたが、脈々とつながっていく取り組みを目指して欲しいと思えます。

さらに、伊万里のために実施していただきたいという思いもあります。伊万里市の小中学生に対して目標を立てており、伊万里の物事を学ぶことをとおして、故郷伊万里を愛し、誇りに思う子どもを育てていこうとしています。伊万里市長も「伊万里に戻ってくる人材を作りたい、住みたい街を作っていきたい。」と考えています。この学校の事業も、まさにこの取り組みにつながっていくと思っています。ぜひ伊万里に戻ってくる子どもたちが増えて欲しいと思えます。

最後にお願ひです。発表の中に小学生の体験教室が出てきていましたが、たくさん入れて欲しいと思えます。小学生の良いところは遠慮せずに評価をするところです。楽しかった時は楽しかったと言うし面白くなかった時は面白くなかったと言います。このことを Win-Win の関係ととらえていただき、交流の場を持っていただけるとありがたいです。伊万里の強みを探究していくとのことですが、それをぜひ小中学生に発信してください。必ず子どもたちが伊万里に誇りを持ってくれると思えます。

【馬場 光弘 氏】

私は工業高校の教員でしたので、今回の課題研究で「地域との絡み」や「その研究をどこに活かすか」に視点を置いて勧められているところが、工業高校と比較して良い点だと思えました。ドローンによる受粉作業のマニュアルをJAに対して作成していましたが、私たちも取り入れていかなければならないと思えました。

また、先ほどから魅力発信のためのマップ作りにクーポンをつけるという話が出ていますが、通常のお店からのプレゼントではなく、農林キャンパスで作成したトーチなどを提供することも考えてはいいのではないかと思います。そのことで、商業科で作成したマップに、農業科で作成した生産物がもらえるという、ひとつの協働の形ができるのではないかと思います。

コミュニケーションの点から加えると、目上の方とのつながりは多かったのですが、小中学生とのつながりが幾分少ないように感じました。今後は、そのようなつながりを増やすことを考えただけであればありがたいと思いました。

今回は地域との絡みがよく見えるいい課題研究発表だったと思います。生徒たちが自分たちで解決できることが、探究活動で最も求められるところではないかと思っています。

【細國 真紀 氏】

最初に発表された「ビジネスプラン」の研究は、この事業の核となるものと思って見ていました。6次化に向けた生産から流通販売まで考えていく学びで、これから農林キャンパスと融合されていくことを期待しています。また、この事業の中で有田工業高校との連携事業を考えていると聞いています。この連携事業も今後期待するところです。

2年目に向けて、さらに地域や他校との連携を進めていただくことを期待しています。また、コンソーシアムが生徒と密につながっていくことで、より良い課題研究につながっていくと思います。

2 コーディネーターの取組について

(1) コーディネーターの配置

① コーディネーターの制定

伊万里実業高等学校における「新時代に対応した高等学校改革推進事業」に関し、関連機関等と連携協力を担う者として、コーディネーターを配置した。

② コーディネーターの任命及び委嘱

管理機関である佐賀県教育委員会より委嘱及び任命を行った。期間については令和5年7月11日から令和6年3月31日までとした。

③ コーディネーターの経歴

坂口 憲一 氏 (株式会社テクノソリューション 取締役事業部長)

【資格等】

中小企業診断士、久留米工業大学客員研究員、人工知能学会 SIG-KST 幹事

【本校での活動歴】

令和4年度「課題研究(ビジネスプラン)」の本校外部講師として、令和4年4月～令和5年1月末迄、毎週木曜日(1コマ)・金曜日(2コマ)に遠隔授業(伊万里市～横浜市)を実施。地域課題の解決やビジネスプラン策定を生徒37名に指導。

活動内容として、本校及び外部組織・有識者との調整や課題研究の講師等を行う。

【主な研究実績】

- ・書籍:「マーケティング・リサーチ」(同文館出版、共著、平成24年)
- ・論文:「先端IT人材の育成を目指す『STEAMベースのIT教育』の提案」(日本教育工学会論文誌第44巻第3号、令和3年)
- ・特許:「ストック使用状況検出装置およびそれを用いたストック使用状況分析方法および装置」(登録:P7089740、令和4年)

(2) コーディネーターの活動

① コーディネーターの役割

通常のコーディネーターとしての役割である「学校等におけるコーディネート機能」と「地域等におけるコーディネート機能」に加え、本事業のカリキュラム開発の一つであるビジネスプランコースの外部講師の役割を担っている。

② 活動実績

期日	役割	内容
8月～1月	外部講師	ビジネスプランコース指導
8月22日	コーディネーター	学校との打ち合わせ
8月31日	コーディネーター	第1回運営指導委員会
9月6日	コーディネーター	五ヶ瀬中等教育学校交流打ち合わせ
9月19日	コーディネーター	学校との打ち合わせ
9月26日	コーディネーター	学校等の打ち合わせ
9月27日	コーディネーター	第1回コンソーシアム会議
10月28、29日	外部講師	全国産業教育フェア発表指導
11月6日	コーディネーター	五ヶ瀬中等教育学校交流打ち合わせ
11月7日	コーディネーター	糸島高校（指定校）公開授業
11月8日	コーディネーター	五ヶ瀬中等教育学校（指定校）交流
11月10日	コーディネーター	伊万里信用組合打ち合わせ
11月14日	コーディネーター	久留米工業大学特別講義
11月15日	コーディネーター	伊万里信用組合打ち合わせ
11月16日	コーディネーター	伊万里市長表敬訪問
11月17日	コーディネーター	学校との打ち合わせ
11月23、24日	コーディネーター	指宿商業高校交流打ち合わせ
11月30日	コーディネーター	高知商業高校（指定校）視察
12月5日	コーディネーター	長田商業高校交流打ち合わせ
12月8日	コーディネーター	伊万里信用組合ビジネスプラン教育
12月28日	コーディネーター	有田工業高校交流打ち合わせ
1月12日	外部講師	日本政策金融公庫北九州地区発表会指導
1月17日	コーディネーター	第2回コンソーシアム会議
1月20日	外部講師	佐世保 StartUp99 発表指導
1月23日	コーディネーター	有田工業高校交流打ち合わせ
2月8日	コーディネーター	課題研究発表会及び第3回運営指導委員会
2月17日	コーディネーター	第3回コンソーシアム会議
3月18日	コーディネーター	糸島高校交流打ち合わせ

3 コンソーシアムについて

(1) コンソーシアムの構成

① コンソーシアムの制定

伊万里実業高等学校における 新時代に対応した高等学校改革推進事業の高等教育機関・地元（自治体・企業・住民）等や専門家・実務家等の外部有識者との連携・協力体制を構築する機関として、コンソーシアムを設置した。

② コンソーシアムメンバーの任命及び委嘱

管理機関である佐賀県教育委員会より委嘱及び任命を行った。期間については令和5年7月11日から令和6年3月31日までとした。

③ コンソーシアムメンバーの構成

所属	氏名	主な実績
伊万里市総合政策部 副部長	松園 家智	地元産業・大学・外部講師との連携等、本校の活動を支援
久留米工業大学 AI 応用研究所教授	小田 まり子	MDASH プラス認定校として、メタバース、遠隔会議等の高大連携を支援
伊万里・有田焼伝統産業会館 館長	寶藏寺 彰	窯業の歴史・文化の指導や窯元等の事業者と本校が協働する活動を支援
有限会社伊万里 グリーンファーム 代表取締役会長	前田 清浩	本校評議員（令和4年度）として、本校の活動を支援
株式会社 Creative Project Base 代表取締役	倉成 英俊	各社の新プロジェクト創出支援や事業の総合プロデュース

④ コンソーシアムが取り組む内容

高等教育機関・地元（自治体・企業・住民）等や専門家・実務家等の外部有識者との連携・協力体制を構築する。コンソーシアム会議は議事内容に応じて、ウェビナーや録画配信等を通じて、視聴者や参加者等から広く意見を募集することを検討する。

(2) コンソーシアムの活動

① 第1回コンソーシアム会議（今年度の計画およびコンソーシアムの意見集約）

日 時 令和5年9月27日（水） 9：30～10：30

場 所 佐賀県立伊万里実業高等学校 農林キャンパス 校長室

参加者 コンソーシアムメンバー

松園 家智 氏、小田 まり子 氏（オンライン）、寶藏寺 彰 氏
学校職員

（校長）三原 聖子、（副校長）中島 淳、北村 昭彦、

（事務長）江頭 誠治、（主幹教諭）世戸 直明

コーディネーター 坂口 憲一 氏（オンライン）

内容

学校長挨拶

本校は商業高校と農業高校が統廃合して設立された実業高校であり、今年で5年目を迎えます。本事業のタイトルに「文理融合」とございますが、「文」が商業高校で、「理」が農業高校を表しております。両高校の歴史も100年以上続いてきた経緯があり、両高校が1つに統合されたことで、今までの伝統を保ちながらも「新しい学校づくり」を進めていくことが大きな課題になっております。従来の教育課程から新しい教育課程に変わるなかで、いろいろなご意見を掛け合わせて、新しい高校の魅力を本校から発信できればと考えております。

いま社会に求められる人材とは、「主体的に行動したり考えたり、自分から学んでみたりしながら、新しいものを創造して実践できる力」を獲得している人達だと思います。一方、受け身の態度やあらゆる情報が溢れているなかで、そのような力を育成する機会が減っていることが教育現場の大きな課題であると認識しております。本事業を通して、生徒たちの学びに対する課題を解決しながら、生徒たちが自ら学んで、社会で活躍できる人材になってほしいと考えております。

まだ本校としても、本事業をどのような方向に進めていけば良いのか、手探り状態ではございますが、コンソーシアムメンバーの皆様のお力をお借りしながら、基礎づくりを進めていきたいと思っております。本日は いろいろなお知恵をお借りしたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

事業に関する質疑応答（◆：メンバー、◇伊万里実業高校）

【寶藏寺 彰 氏】

- ◆ 農業以外にも、いろいろな職場のところに行ったり、そこで体験されたりするのですか？
- ◇ 現在の学校教育では、職場見学以外にも大学等にオンライン講義をお願いしたりすることもあり、「現場に行って体験する」授業だけではなくなりました。
- ◇ 今回の文科省事業の大きな特徴として、デジタル技術の活用があります。デジタル技術を教育現場に導入することで、アナログでは絶対できなかったような授業も実施できることが、これから重要になってくると思われまます。例えば、遠隔授業やメタバースという仮想空間で可愛いキャラクターが出てきて店舗を開設するようなことがあれば、生徒も楽しく学ぶことができるのではないかと考えております。
- ◆ 自分の足で地元を歩き、風を感じ、地域の方々がどのような生活をしているのか、「五感で感じて学ぶ」ことも必要なのではないかと思います。
- ◇ 文理融合というものは、例えば、農業の生徒であれば「作る・生み出す」ことは、一生懸命に取り組むのですが、「そのあとはどうするのか？」という視点では学べていません。一方、商業の生徒は「机上でデータ整理・処理をする」ことは一生懸命に行うのですが、第一次産業でどのような苦勞をしているのか、消費者が求めているものをどうすれば生産できるのか、という知識がありません。「現場を見て感じる」ということは非常に重要だ

と思います。「どのような分野で有効な学びができるのか」ということを考えながら、現場に行ったり、オンラインで学習したりするなどを選択していかなければならないと思います。

- ◇ 「ICT 機器の良いところ」と「実際に体験すると良いところ」の両方を上手に活用していくことが重要だと思います。ICT 機器を活用すると、「生徒が学ぶきっかけ」を作り出すことができますと思います。きっかけを得た生徒は自分で学び、今度は実際に現場で体験するという流れができると思います。幅広い知識のところ、ICT 機器を上手に活用していくことが必要です。一方、本校は専門高校ですので、専門性を極めていくことがとても大切ですので、ICT 機器はあくまでもツールとして活用していくことを考えていきたいと思います。

【松園 家智 氏】

- ◆ 昨年度、課題研究のワークショップに、伊万里市役所からも職員が多数参加させていただきました。生徒さんたちが「課題解決に向けてどのように取り組んでいけば良いのか」という観点で、年間を通じて授業をされていると思いますが、実業高校の生徒さんは卒業すれば、就職して社会人になりますので、ある程度、法的なルールについても学ぶ必要があると思います。単純に「アイデア出し」で終わるのであれば良いのですが、「課題解決であれば、法的にできません」ということになりますので、今後の課題研究においては、「法律の縛り」についても配慮しながら進められると良いと思います。
- ◆ 今後、「農業がどのように変わるのか」という将来のビジョンをしっかりと抑えたうえで、課題研究を進めることが大切だと思います。伊万里市長もよく言われることですが、これからの社会は Society5.0 に向けて、ICT やデジタルの活用は避けて通れませんが、あくまでも「ツール」であるということです。ビジョンを明確にした上で、課題研究を実施する意義を抑えることが重要だと思います。世の中（産業）の仕組みを知らずに、課題研究をいきなり始めるのは難しいと思います。そして、卒業すればすぐに企業の中で通用する人材を育てていただきたいと思います。
- ◆ 生産・販売の全ての分野を学べるのが、この実業高校の強みだと思います。
- ◇ 農業と商業が同じ科目をそれぞれ受講しているのですが、生徒だけではなく、教員が1つの授業を担当することも必要だと感じました。

【小田 まり子 氏】

- ◆ 今年度前期に、本学の学生2年生が取り組みました「課題解決型授業」のなかには、イチゴの品質評価を AI が実施するものやキュウリの本数算出や等級判定（A・B・C ランク）を AI が実施するなどのプロジェクトもありました。今年度の計画では、伊万里実業の生徒が本学に見学でいらっしゃる予定があるとお聞きしておりますので、本学の学生が直接、そちらの生徒に説明することが良いのではないかと思います。また、食品関係や

食育などについても、授業内容をアプリ化したり、AIやAR（拡張現実）の技術を活用して新しい教材を開発したりすることにも応用できるのではないかと思います。

- ◆ 伊万里実業さんの進学状況について教えてください。
- ◇ 商業キャンパスでは、大学と専門高校を合わせて進学率は5割程度になります。そのなかで3割程度が大学に進学します。農林キャンパスでは、4年制大学に進学するのは数名程度で、進学者のほぼ全てが専門学校に進学します。進学率は全体の4割程度で、就職が6割～7割程度になります。就職のうち半数は地元に残ります。
- ◇ 普通高校から大学に進学するケースと専門高校から大学に進むことでは、その目的が大きく異なります。普通高校の場合には、自分が進学できる学力や学びたいことで進学できる大学が決まると思いますが、大学に進学する専門高校の生徒は「高校で学んだ専門をさらに大学で学んで、地域に貢献したい」という考えがあります。今回の文科省事業を通じて、いろいろな授業を展開することで、生徒たちには「進学」にも目を向けて欲しいと思います。高校で学んだ知識だけでは足りないので、大学へ進学してさらに専門を学び、地元に戻ってきて、地域貢献ができるという考え方です。そして、高校の専門性を生かした進学先（大学）を選ぶ生徒が増えて欲しいと考えております。文科省事業を通じて、「自分たちがやりたいことは、大学で勉強するとさらに具体的に学べるんだな」というところに気づけると非常に良いと考えております。そのため、いろいろな大学の特徴を教えてください、大学と一緒に取り組むことは、本学にとっても非常に魅力的な内容です。
- ◆ 同じベクトルの中で「就職によって実践から学ぶのか」、「大学で学ぶのか」の違いだけで、「これがしたいんだ」という明確な意図を持った生徒を専門高校から送ることができるというイメージですね。
- ◆ 今後、本学では「女子学生を増やしたい」という希望がございますので、実業高校との接点は増やしていきたいと考えております。久留米市も伊万里市とよく似ているところがあります。課題解決型授業にはいろいろな企業も参加しております。今後は高校生にも参加してもらえると、授業の活性化にもつながるのではないかと期待しております。

② 第2回コンソーシアム会議（コンソーシアムと生徒との交流）

日時 令和6年1月17日（水） 15:00～17:00
場所 佐賀県立伊万里実業高等学校 農林キャンパス 視聴覚室（オンライン）
参加者 コンソーシアムメンバー
松園 家智 氏（オンライン）、小田 まり子 氏（コメント回答）、
寶藏寺 彰 氏、前田 清浩 氏、倉成 英俊 氏（オンライン）
生徒 各研究班発表者
職員 （主幹教諭）世戸 直明

内容

■コンソーシアムメンバーによる指導助言

(1) 生物科学科研究班：前田 清浩 氏

- ◆ なぜ研究対象に「梨（伊万里梨）」を選択したのか、その理由を明確にした方が良いのではないかと。
- ◇ 伊万里において、「梨」がどの程度の市場規模になっているのかを調べた方が良いのではないかと。
 - 販売額が一番大きいもの（例えばぶどう？）を選択した方がインパクトも大きいと、梨について説明があると聴講者にとっても分かりやすいと感じた。
- ◆ もし労働時間について、北海道ではなく、伊万里 or 佐賀県 or 九州のデータがあると分かりやすい。
- ◇ 梨の月別の労働時間の差異がなぜ大きいのか、平準化することはできないのか、についても考えていただくと良いのではないかと。
- ◆ ドローンの活用については私も興味があるが、梨は露地栽培だけではなく、ハウス栽培もあるため、ドローンをどのように活用するのか説明があると良い。
- ◇ 今年、梨の栽培（受粉不足）は非常に難しいと聞いているが、「労働時間の削減」以外にもどのような取り組みを支援できるのかを考えてもらえると良いと思う。
- ◆ ドローンの活用以外にも何か他の解決策がないのか、あるいはドローンを選択した理由があると良い。
- ◇ 研究発表の全体としてはたいへん素晴らしいが、「授粉」以外の作業についても労働時間を削減する方策がないと、人手不足の解消が難しいことも理解してほしい。

(2) 環境工学科研究班：寶藏寺 彰 氏

- ◆ 研究発表としての流れ（起承転結）が明確であり、安全に配慮しつつ木材加工製品を製作して、販売に向けた取り組みを進めている点はとても素晴らしい。認知度が低い木材加工製品をさらに生産・販売していこうという意気込みが理解できる。
- ◇ 「森林と伊万里の魅力を発信」について、研究発表の冒頭に提示する方が、皆さんのメッセージが伝わるのではないかと。
- ◆ 発表者は全体の概要や話すスピードを注意すれば、とても素晴らしい発表になると思う。

(3) フードビジネス研究班：前田 清浩 氏

- ◆ 対象者の幅が広いカフェ・喫茶店に関するマップを製作する取り組みはとても素晴らしいが、さらに踏み込んで、お店の魅力や特徴を発信できると来店客を増やせることができるのではないかと。お店の紹介だけでは弱いように感じる。

伊万里のご当地グルメ「伊万里牛ハンバーグ」を広めたのは私だが、品質を管理するためにパテを製造するのは一店舗のみにして、同じパテを複数のお店で利用することで地域とグルメの両方の知名度を上げる効果で来店客の来訪を促した。

- ◇ マップを製作した後の更新にかかる費用をどうするのか。伊万里牛の場合には、パテ肉の销售价格の中にあらかじめ販売促進策の活動費を入れておき、そのお金を次の費用に充て、マップを更新するなどを実施した。更新・継続する仕組みを用意の方が実現性がさらに高まると感じた。

(4) ビジネスプラン研究班：松園 家智 氏

- ◆ 「企業経営上、何を理解したのか、何が大切なのか」を明確した方が良いと思う。

(5) 商業デザイン研究班：倉成 英俊 氏

- ◆ プレゼン発表をして、リアルなフィードバックを得ることで、「成功 or 失敗した」という経験を得ることができれば良いと思う。本日が仮に研究発表会の本番とした場合、私が感想を求められたら、「で？、何なのさ。その続きを聞かせてほしい」と思う。何に感動したのか、何を学んだのか、という皆さんの心の部分を書いていないので、よく分からない。
- ◇ 実業高校は学校というよりも、社会とつながっている部分だと思うので、学校っぽくて損しているのではないのか？商業高校の場合、「面白かったのか？」という部分がとても大切だと思う。聴講者の人々が感動するようなプレゼン発表を期待する。皆さんのライバルは、YouTube や Netflix だと理解してほしい。

(6) プログラム研究班：小田 まり子 氏

- ◆ 最初の目標として、(人の)役に立つプログラムの作成を掲げておられましたか、役に立つプログラムとはどのようなプログラムを想定しているのでしょうか？そして、具体的に役に立つプログラムは開発できましたか？誰かに使ってもらい、感想を聞くことはできましたか？
- ◇ また、プログラミングに取り組むことでチャレンジ精神が身に付きましたか？
- ◆ 本番には、ぜひ実際のゲームを動かしながら、説明してくれることを期待しています。

(7) 簿記研究班：松園 家智 氏

- ◆ 資格を持たずに就職するよりも、日商簿記を取ったほうが就職にも有利だと思う。しかし、企業側が求めている人材は何か？単純に資格だけではないので、その点についても学んでほしい。

■全体を通じた意見交換

- 1 農林キャンパスの発表 (No.1~No.3) については、一般的な分野の課題に対す

る解決策を考えたという内容であるが、地域における課題を勉強して解決策を考えるという深掘りした研究になるのか、表面的な学習になるのかを教えてほしい（松園様）。

→文科省事業の採択に際して、本校は実業高校として地域課題の解決に資する人材を育成することが必要だと考えている（世戸）。

- 2 今日のアドバイスを聞いて、「いいな」と思うものは取り入れれば良いし、「違うな」と思うものは無視しても良いのではないか。生徒さんたちは、「自分を信じて、正しいと思うもの」を取り入れてほしい（倉成様）。

→私たちも経験上、話しているだけですのですので、生徒さんたちもこれから社会に出ていく訳ですから、自分で判断して取捨選択することが大切だと思（世戸）。

③ 第3回コンソーシアム会議（課題研究に対する評価と課題、教員のスキルアップに向けて指導力向上）

日 時 令和6年2月21日（水） 16:00～17:00

場 所 佐賀県立伊万里実業高等学校 農林キャンパス 視聴覚室（オンライン）

参加者 コンソーシアムメンバー

松園 家智 氏（オンライン）、寶藏寺 彰 氏、
倉成 英俊 氏（オンライン）

職員

（校長）三原 聖子、（副校長）北村 昭彦、（事務長）江頭 誠治、
（主幹教諭）世戸 直明、（教諭）福永 正昭（オンライン）、
金崎 洋介（オンライン）、永石 浩之（オンライン）、前田 菜美子
コーディネーター 坂口 憲一 氏（オンライン）

内 容

冒頭挨拶（世戸）

今回のコンソーシアムは、課題研究発表会を外部の方々に見ていただき、客観的なご意見・ご感想をいただくことで、より良いものにしていくことを目的としています。よろしくお願いします。

課題研究に関する説明（世戸）

現在、全国的に「探究学習」が話題になっており、普通科高校においても「総合的な探究の時間」（総探）という教科で探究活動に取り組み、いろいろな効果が報告されています。本校のような「農業」や「商業」といった専門高校においては、「課題研究」という探究活動を目的とした専門教科があります。普通科の探究学習との最も大きな違いは、「1、2年生から学んできた専門知識を活用した集大成が課題研究である」という点です。1、2年生で学んできた専門知識を活かして課題を発見し、その課題を解決するという点が「課題研究」の特長であり、さまざまな分野の知識を学ぶことができます。

この課題研究の内容は、4つあります。①調査、研究、実験、②作品製作等、③

産業現場等での実習、④職業資格の取得です。この4つの活動のなかには、探究する学習活動を取り入れるように留意することが学習指導要領では示されています。

- (1) 今回の課題研究発表において、どの発表が最も良かったのか、その良い点について教えてください。

【寶藏寺 彰 氏】

ナシの受粉の研究が良かったです。現場においてきちんと仕事ができるという点が良いです。ドローン操作の精度を上げなくてはいけない課題もあるようですが、現場に適用できる点が非常に素晴らしいと思いました。ナシ栽培に従事する高齢者が多くなっており、栽培農家の支援に寄与できると思いました。

(世戸)

「後継者不足をどのように解決していくのかという点が、課題研究の始まりである」ということを担当教員から聞いております。

【松園 家智 氏】

課題研究と6次産業化に係るプログラムが、どのような関係・連携になっているのか、よく理解できませんでした。あくまでビジネススキームという捉え方で、ビジネススキームの視点から各研究班の発表を見たときに、正直、物足りなさを感じました。

研究の中で6次産業化のビジネスを考えたときに、一番必要なことは、ビジネスプラン研究班が発表した中身を、1年生の時から共有することが重要ではないかと思います。ビジネススキームについて、ある程度基本的なところは理解したうえで、学校側のカリキュラムで授業を受けることによって、生徒の受け止め方もいろいろ変わってくるだろうと思います。そのときに新しい課題の発見の仕方や分析の仕方等、いろいろと変わってくるはずだと思います。その点が直感的な感想になります。

【倉成 英俊 氏】

発表については、共有いただいた動画でしか見ていないので、分かる範囲ですが、みんなきちんと一生懸命にやっていて良いのではないのでしょうか、というのが全体的な感想です。

面白かったのは、前回、私が担当とした映像班の生徒達に「何を伝えたいのか？」という話をしたと思うのですが、その点を意識して、自分たちの考えや個人的な感想を盛り込んだのかなと思います。映画の予告編が良いですね。私1人で観ていたのに笑ってしまいました。おじさんのセリフの入れ方が良かったなと思います。木材に関しては、プレゼンの仕方があまり枠にはまらなくて良かったと思います。また、ドローンの生徒達はマニュアルとして伊万里市に提案したという部分がとても良いのではないかと思います。全体的には一生懸命に取り組んでいたなあ、という感想です。

(世戸)

発表会では生徒達は緊張もしますが、回数を重ねれば重ねるほど、生徒達の自信にもつながり、成長を促すことができるだろうと私たちは考えています。その

際には、内輪だけの発表会ではなく、外部の方々にもどんどん参加していただき、さまざまなご意見・ご感想をいただくことで、新しい風を巻き起こすことができるのではないかと考えております。

【坂口 憲一 氏】

皆様、ご意見くださいまして、ありがとうございます。今回の文科省プロジェクトは、基本的には「6次産業化を推進していく」ということですが、これは、本校が設立された大きな背景だと思います。6次産業化に資する人材を育成していくためにも、この課題研究があると良いと考えております。そのためにも、松園様からご指摘いただいた「6次産業化と課題研究との関係性」というものを、私たち学校側、先生方も含めて、きちんと議論する必要があると思います。

(世戸)

これまではキャンパス別々に課題研究発表会を実施してきましたが、今回初めて両キャンパス合同で課題研究発表会を開催しました。例えば、農業科の生徒が農作物を育てて自営を考えた時に、「経営」という部分が弱かったというイメージがあります。「どうすれば儲かる農業になるのか？」という点が重要なキーワードになるかと思いますが、農業科の生徒達がビジネスプランの発表を見たときに、「儲かるためにはこれだけの計画を考えておかないといけないのか」ということを新たに知ることができたと思います。自営農業を進めていくためのヒントを得ることができたと思います。

今回、1、2年生にも課題研究発表会を視聴してもらいましたが、これから2年または1年かけて学んでいかなければならないことを気づくことができるのではないかと考えております。両キャンパスにおいて、お互いに「見る」・「知る」ことから始めることで、必要な知識を取捨選択することができるのではないかとと思います。

6次産業化というと、すぐに「コラボ」というのが目につきやすいですが、私達はそれぞれの専門性をさらに高めることが必要であり、そのきっかけ作りを進めていくことが学校側として必要なことだと思います。

- (2) 学校側のスタンスを踏まえた上で、課題研究の在り方についてご議論をお願いいたします。

【寶藏寺 彰 氏】

「6次産業化」や「文理融合」を考えた時に、どのような原価があるのか、そして原価に対する販売価格について数字的にも考えたうえで、商業の強みや農業の強みをお互いに活かす・補完することが必要だと思います。生徒が卒業した後も、そのような経験が活かされると思います。

(世戸)

課題研究を進めるうえで、「データ処理・活用」はとても重要になります。同じデータでも、見方や活用の仕方で大きく変わると思います。商業・農業のお互いの取り組みを知ること、データの捉え方についても学ぶことができたと思います。

【松園 家智 氏】

今回の課題研究発表会の最終的な評価は、生徒や学校ではなく、就職先企業や進学先教育機関等の外部評価がとても重要だと思います。農業分野・商業分野の様々な分野において、実業高校の卒業生が多く輩出されておりますので、いろいろな企業にも参加してもらうことが良いと思います。

学校教員では不足する専門的な知見については、それぞれの専門家である企業にも協力してもらうことが良いのではないかと。

(世戸)

外部からの評価をいただくこと、そして、オンラインを通じて外部専門家のさまざまな知見を得ることができることが、今回の文部科学省の事業において求められています。その点、コーディネーターの活動を通じて、外部との連携実績も出てきていますので、文部科学省の支援がある間に、成功事例を1つでも多く増やして、多くの専門家と繋いでいくことで、外部からの評価もいただけるようにしていきたいと思っています。

【倉成 英俊 氏】

「文理融合という傘の下に、6次産業化を推進する人材を育成する」ということだと思いますが、「文理融合」というのは、商業科（文）と農業科（理）がミックスされた状態のことを指しているのでしょうか？

(世戸)

文部科学省への事業計画としては、商業科を「文」、農業科を「理」として提出しています。

(三原)

「融合」というのは、1つにするという形態に限らないと考えています。企業の皆様からのご意見では、即戦力となる人材が採用できないというご意見・ご感想もございますが、私としましては、自分とは異なる能力を持った人たちがプロジェクトチームを編成するなどをして、一緒に活動することで、何か物事を創造したり、課題を発見・解決したりする力を養うことも「文理融合」と考えております。商業科と農業科の双方が足りないものを、お互いに補うことが大切だと思います。この「文理融合」をどのように実践していくのかという点が、本校の最も大きな課題だと認識しております。

(倉成氏)

ありがとうございます。各研究班の発表を動画で拝見しましたが、1年間の活動において、商業科の研究班の活動に農業科の生徒が参加したり、逆に農業科の研究班の活動に商業科の生徒が参加したりするなどの横断的な活動を実践したうえで、最終的な研究成果として、それぞれの研究班が発表した、という理解でよろしいでしょうか？

(世戸)

今回は、文部科学省事業の1年目ということで、商業科・農業科それぞれが単独で課題研究を実践して、最後の発表だけ合同で開催するという形となりました。来年度からは、1、2年生も探究学習（伊万里市の地域を学ぶ学習）を実践する

ことで、横のつながりを確保していこうと考えています。

(倉成氏)

全体の印象としては、「きちっとしているな」という印象です。良くもあり悪くもありという感想です。

悪い面では、生徒も先生もつまらなそうだなという印象を持ちました。この先に、これらのサービスや商品を消費者に購入してもらわないといけないが、生徒も先生も「やらされ感」がとてもあるなあ、という印象です。この先、本当にこれらのサービスや商品を消費者が本当に購入してくれるのだろうかと考えてしまいます。課題研究のプロセス自体が、もっと自発的で、みんなが積極的に熱い気持ちを込めて取り組まないと、6次産業化は難しいのではないかと思います。

文部科学省の事業は、広すぎて、何をやってもハマると思います。私は逆の発想で、本当に皆さんがやりたいこと（6次産業化でやりたいこと、文理融合でやりたいこと）を突き詰めて成し遂げれば、後から文部科学省の枠に当てはめても良いのではないかと思います。文部科学省の考えている順番で取り組むのではなく、いま社会が求めていることを取り組んで、後から文部科学省の枠に当てはめたら良いと思います。

このままだと日本はやバイと思っているので、皆さんが取り組んだことを文部科学省に教えた方が良いのではないのでしょうか。文部科学省はビジネスについて専門外なので、ビジネスが得意ではありません。皆さんが一国民・一市民・一消費者の目線で取り組んだことを、最後に文部科学省の枠に当てはめる方が良いと考えます。そのほうが本質的な学びになるのではないのでしょうか。

教科書的なフレームワーク、ビジネスモデルなどを実践していた動画だと思いました。アイデアも想像を超えたものではありませんでした。ゲームもスイカゲームを学生に置き換えたものですし、プログラミング技術を習得する点では良かったと思いますが、「良かった」とはどうしても言えません。ドローンについても、世界中の農業分野ですすでに取り組みされているのに、またやるというのは、すでに遅いと思います。基礎の習得をきちんとやるというカリキュラムであればそれで良いと思いますが、もっと先に行った方が良いのではないかと思います。

先生方の意識改革を進めた方が早いのではないかと思います。「一同、礼」で始まるプレゼン大会はもう世の中にありません。きちんとしたプレゼンのフォーマット（起承転結）で学んだことを報告させるのではなくて、やり方も自由、もっとカジュアルで、世の中の一般的なプレゼン大会に出しても、みんなが何かしら学んで帰ってくる、というのが必要なのではないのでしょうか。文部科学省の枠に当てはめて、学校教育の中でやっている感じがします。せっかく実業高校で、6次産業化で、文理融合で新しいことをしようと考えているのであれば、先生方の枠を壊して進めない限り、日本で一番にもなれないし、世界にも出ていけないと思います。

すでに外部からの受賞・評価もいろいろとあるようですし、それが今回のプロジェクト設立の目的に達しているのであれば良いと思いますが、客観的に見ると、社会・実業界とのズレがあると思います。

(世戸)

どうすれば生徒達の興味・関心を高めて、課題発見力を育てていくことができると思いますか？来年度は、1、2年生にも探究学習を取り入れて、興味・関心を抱くことを進めようと考えています。

(倉成氏)

ファシリテータの力量だと思いますので、なんとも言い難いです。アメのぶら下げ方なのか、好奇心やモチベーションのくすぐり方なのか、なぜ商業高校・農業高校に入学してきたのか、将来の夢はどうか、というところもあるので非常に難しいですね。

どれだけ失敗が許されて、どれだけ外れたものでも待てるのか、という先生方の考えにも依存するかと思います。

今回の発表では、失敗のしようがないと思いますが、本当に自分のやりたいことを突き詰めるような自由研究的なものだとしたら、スモールステップを重ねて、失敗にも目をつぶるということも必要だと思います。どのような方法が伊万里実業や伊万里の風土に適しているのか、ということを考えていきたいと思っています。

(世戸)

課題研究が専門教科の集大成となっているため、研究テーマの設定については、教科の範囲に置くというのがあります。

また、農業科では課題研究発表会の前に予選を実施しており、失敗しているものもたくさんあります。

質問のもう一点は、ドローンのような最先端技術や知識を教員が学ぶことは時間的にも負担が大きく、また予算面でも制約があります。その点について、何か打開策があれば、ご意見をお願いいたします。

(倉成氏)

実現可能性の議論を脇において話すと、「学校の先生方全員に研究予算をつける」ということが大切だと思います。私は広告業界の仕事をしておりませんが、例えば10社のクライアントと仕事をしていると、同時に10社の業界に関する最新情報が入ってきます。会社の経費を使ったり、あるいは自費で業界をリサーチすることがあります。学校の先生方の場合には、情報収集に大きな制約があります。ピッチの方法についても、日本全国や世界で行われている方法を見ても、いろいろと変わってくると思います。これは県の政策としてもやるべきだと思います。

一方、ドローンやプログラミング等については、先生方よりも生徒の方がよく知っています。クリスマスプレゼントでドローンのおもちゃをもらったり、興味がある生徒は自発的にどんどんプログラミングを学んでいきます。それを考えると、学校の先生方が最先端技術・知識を学ぶ必要性が本当にあるのかという疑問を持ちます。むしろ生徒達にやらせた方が良いのではないかと。やる気がある生徒に予算をつけて、逆に先生方に教えてもらう方が良いのではないかと思います。

(世戸)

実際に、TikTok等、動画の編集等は、生徒の方が非常によく知っています。

【松園 家智 氏】

ドローン等の最先端技術を学ぶことは一般常識として必要なことですが、現実問題として伊万里市の農業に落とし込んで合致するののかということ、合致しません。現場の現状と課題をきちんと学ぶことが必要です。

今回、ビジネスを学ぶという点において、1つアイデアがあります。国交省に勤めている友人の例です。彼が小学生の頃に、小学校にある銀杏を商店街で売ってくるという勉強をさせられたそうです。最初は、価格を安くした方が売れるだろうと考えて、値段を安くしたそうですが、まったく売れなかったそうです。理由は小学生ということで、まったく信用がなかったからです。その後マーケティングを勉強して、最終的に儲けが出るようになったそうです。「農業科で栽培した農作物を売ってこい」というだけの課題研究も良いと思います。顧客目線や市場動向などを学ぶという点では非常に良い取り組みだと思います。

【寶藏寺 彰 氏】

高校で学ぶことは、社会に出てから役立つことだと思います。コミュニケーション能力や物の見方、人とのつながりなど、いろいろな経験を得られることができます。社会に出てからの人との関わり合いを学ぶ機会になります。

(世戸)

次年度以降も、皆様からの貴重なご意見・ご感想を賜りたいと思います。引き続き、よろしくお願いいたします。

4 交流事業について

(1) 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校

① 実施報告

経緯	宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校は、本校と同様に令和5年度、新たに文部科学省による「新時代に対応した高等学校改革推進事業（創造的教育方法実践プログラム）」の指定を受けている。本事業では、他地域における様々な関係機関からの同時双方向型の授業を取り入れたカリキュラム開発を行い、新しい時代の学びを創造することが求められている。そのため、先方より本校に交流会の申し入れがあった。
対象	伊万里実業高校1年生及び農業クラブ役員
目的	多様で幅広い視点をもって地域課題の解決に向けた能力を身に付けるために、他地域の学校と交流することによって、お互いの地域における文化や産業、風土の違いに気づくとともに、伊万里の新たな価値を発見する。また、他校の生徒とグループトークを行うことで、コミュニケーション能力と自らの考えを伝える力を育成する。
日時	令和5年11月8日(水) 9:05～12:25
内容	9:05～ 9:15 開式(学校長挨拶) 9:15～ 9:45 基調講演(各教室でオンライン) 9:45～ 9:55 質疑応答

【以下の行事は農業クラブ役員のみ授業引き抜きで参加】

10:05～10:25	学校紹介（各校10分）
10:25～10:40	アイスブレイク
10:40～11:40	グループトーク
11:45～12:15	課題解決に向けての討論
12:15～12:25	まとめ・講評

講師紹介 ベジエイト株式会社 専務取締役 重富 裕貴 氏

（五ヶ瀬中等教育学校卒業生）

東京で法律関係の仕事に携わっていたが、農業界のピンチをチャンスと見出し、宮崎に戻る。父とともにベジエイトを発展させ、現在は広大な選果場を保有、宮崎でも有数の農業法人に成長している。農業に関わるさまざまなビジネスを広げ、総合農社をつくりたいという夢をもつ。

（参照 無限の価値を創造する「総合農社」へ agri-connect.co.jp/case/vege8）

備考 五ヶ瀬中等教育学校参加数 生徒 3、4年生（中3、高1） 71名
職員 11名
コーディネーター 2名

② アンケート結果

a フォーラム全体の内容について目的に合致していたか。



b フォーラムの内容に満足できたか。



c フォーラムをとおして他校、他学年の生徒と親交を深めることはできましたか。



③ 振り返り

重富氏による基調講演は生徒だけでなく、教員にも非常に好評であった。次年度の1年生にも聞かせたい内容であったとの声も数多く寄せられた。そこで、次年度の総合的な探究の時間における外部講師の予定に入れている。

また、農業クラブ役員が参加したグループトークも非常によい企画であった。異なる地域、学校、学年の生徒と意見交換することで、これまで気づくことができなかった地域の課題に気づくことができたと参加した生徒の多くが意見を述べていた。

この企画は、両校にとって有意義な交流となったため、次年度も引き続き交流を予定している。

(2) 久留米工業大学

① 実施報告

期 日：令和5年11月14日（火）14：00～16：30

場 所：久留米工業大学（福岡県久留米市上津町2228-66）

参加者：商業科3年17名、生物科学科3年11名、引率4名、コーディネーター

研修内容

a メタバース体験（河野教授）

久留米工業大学が開発したメタバースソフトを実際に体験した。このソフトは、仮想空間に久留米工業大学構内を再現し、学内を自由に散策したり講義を受けたりできるものである。この開発により、将来的には物理的に離れた場所でもメタバースを介して大学に通学が可能となる。初めての仮想空間の体験に生徒は大変興味を示しているようであった。

b 情報ネットワーク工学科体験授業「AIを用いた課題解決：画像認識プログラム」（小田教授）

小田教授よりAIによる画像認識プログラムを活かしたキュウリの選別について指導していただいた。このプログラムは、「真っすぐなキュウリ」と「曲がったキュウリ」をAIに判断させることで規格の判定に活用できる。授業では、生徒一人一人がプログラミングソフトを用いて、異なる形のキュウリの実物をコンピュータに何度も学習させ、簡易的な画像認識プログラムを作成した。また、作成したプログラムで実際にキュウリの判定を行った。

c AIを用いた「地域課題解決型PBL」成果発表（久留米工業大学学生）

「イチゴの自動摘み取りのための完熟度予測」

この研究は、AIを活用したイチゴの完熟度予測に関するものである。イチゴ果実の色に着目し、果実の色づき具合で熟度を判定し、それを収穫期判断や収量予測に生かすという。彩度と明度の組み合わせで色を細かく分類することで、より精度の高い熟度予測を実現していた。

「収穫したキュウリの品質評価アプリの開発」

この研究は、AIの画像認識プログラムを活用したキュウリの品質評価に関するものである。様々な形のキュウリをコンピュータに学習させプログラムを作成していた。このプログラムの開発により、出荷されたキュウリの選別のほか、育種

分野での果実品質調査への活用に期待されているようだ。

② 所感

本校は、「キャンパス制で離れた2つの校舎」と「商業科と農業科の併設校」という特色を持っている。久留米工業大学は、まさに本校が理想とする取り組みをされているのではないかと感じた。

メタバース開発は、仮想空間を作ることで移動せずに仮想空間内で様々な活動が可能となる。本校の離れた2つのキャンパスを繋ぐツールとして、大変良い手段であると感じた。操作は難しくなく、初めての生徒でも容易に使いこなせていた。SNSやオンラインゲーム内でのコミュニケーションに慣れている高校生が多い時代だからこそ、高校へのメタバースの導入は時代に合った形かもしれない。このような次世代型のツールを生徒が体験できたことは、本研修の大きな成果である。

また、久留米工業大学による農業分野へのAI技術の活用に関する研究は、まさに本校の文理融合型教育の実現につながる一つの方法であると感じた。伊万里市にも地域農業の課題は多くある。そのような課題をもとに、商業科と農業科の両者が専門性を生かして協働的に研究に取り組むことで、幅広い視野での課題解決力の育成に繋がると思う。

本校生徒は、今回の研修で自分の専門性を生かして主体的に研究に取り組む久留米工業大学生との交流を行った。また、商業科と農業科の両分野のより専門的で発展的な内容を学習した。この経験を生かして、少しでも広い視野や主体性を持って今後の学習活動に取り組んでくれることを期待している。



図7 メタバース体験の様子



図8 画像認識プログラム体験の様子



図9 大学院生による発表の様子



図10 参加生徒の集合写真

5 先進校視察報告

(1) 福岡県立糸島高等学校

① 実施報告

『令和5年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業」

創造的教育実践プログラム第2年次 第2回実践発表・公開授業』

参加者：主幹教諭、コーディネーター

実施日：令和5年11月7日（火）11：00～16：30

内 容：学校長あいさつ

福岡県教育委員会あいさつ

公開授業Ⅰ

公開授業Ⅱ

全体協議会（公開授業Ⅰ・公開授業Ⅱの授業担当者講評）

第2年次事業内容説明（中間発表）

（1）第2年次事業内容説明

（2）事業に取り組む生徒発表

（衛星データの利活用、ソジョン高校との共同研究による発表）

（3）創造的教育方法実践授業受講生徒との意見交流会

質疑応答

学校長あいさつ

② 所感

研究事業と実践発表・公開授業はセットだと考えられており、年間に3回程度の公開授業を実施している。内容は「授業のオンデマンド化」「教科等横断的カリキュラム（糸高志学）」「論理コミュニケーション」「遠隔同時双方向型授業」であり、「1人1台のChromebook配備」や「学校ネットワークの整備」「外部資源の活用（大学・企業との連携）」を基盤として、授業が展開されていた。公開授業実施するメリットとして、どの授業もよく工夫されており、ICTをうまく利活用した内容であった。特に教科横断型の内容として、国語科と英語科がコラボした古典文の解説は参考となった。反面、教材準備大変さは否めず、このような取り組みは一度にすべてを実施するのではなく、段階を経て、計画的に実施することで職員の負担感が軽減すると思われた。

全体協議会では授業担当者の自評と合わせて受講生徒の感想を聞くことができた。授業を一方通行にしないためにもよい企画であると感じた。特に、これまでの学びでは気づくことができない学びができていたといった生徒の感想が印象に残っている。

第2年次事業内容説明では、韓国ソジョン高校との国際オンライン研究および交流、衛星データの利活用事業に取り組む生徒の発表を見ることができた。外部資源をオンライン利用して活用している点は参考になるものであった。今後、外部資源を積極的に活用することが求められているが、オンラインをうまく利用することで、費用面も含めて負担軽減が可能になると思われた。

(2) 指宿市立指宿商業高等学校

① 実施報告

自校企画による視察

【第1回】

参加者：坂口コーディネーター

実施日：令和5年11月23日（木）

11月24日（金）

内 容：指商デパート見学

高校生株式会社の設立と運営について

【第2回】

参加者：江頭事務長、世戸主幹教諭、松浦教諭

実施日：令和5年12月20日（水） 10：00～12：00

内 容：指宿商業高校の概要

株式会社指商について

指商デパート

コンソーシアム IBUSHO

質疑応答

② 所感

鹿児島県で最も志願倍率の良い商業高校で、それを裏付けるように、学校に活気を感じた。かなり広範囲から生徒が通学しており、学校の魅力発信次第では生徒が学びたい学校が実現できる事例だと感じた。

株式会社設立の方法について説明をいただいたが、どこの学校でも可能であることがわかった。運営については、課題研究と学校行事をうまく融合させて実施されていた。本校で株式会社組織を導入するにあたっては、以下の課題が考えられる。1)何を目的に、何を活動内容とするのかを決めること。目的と内容によって、どの授業でどの生徒や教員が担当するのかが決まることになる。2)メリットとデメリットを理解する。メリットは生徒が株式会社を体験できる、地域との関係が作りやすい、広報に使いやすいなどで、デメリットは設立するのに労力が必要、一度設立するとやめにくいなどである。3)関係職員の負担増。校舎制の学校でもあり、担当職員の負担増加が懸念される。

株式会社の設立については、本校においても検討を開始しており、お互いの株式会社で販売物の交流ができないか協議を行った。しかし、本校での株式会社の早期設立は難しいことから、まずは本校で生産する生産物を指商デパートで販売品目として取り扱っていただく形で交流事業を協議していく。

(3) 高知市立高知商業高等学校

① 実施報告

参加者：世戸主幹教諭、坂口コーディネーター

実施日：令和5年11月30日（木） 13：30～17：00

内 容：事業概要の説明

授業参観

課題研究参観

- ① 地元スーパーとのコラボ企画「子ども食堂の運営」
- ② プロジェクションマッピングによる保育園との連携
- ③ NPO法人及び自治体との共同子ども食堂運営
- ④ 地域の魅力発見プログラム研究

授業担当者との意見交換

学校の紹介

② 所感

文科省の事業を学校全体で、全職員が意思統一して取り組まなければならないが、そこまで醸成されていないとのことであった。しかし、前向きに取り組まれている職員が多くいる印象で、学校全体に活気を感じることができた。特に、職員研修に力を入れており、商業科にも探究活動を導入する必要性を強く感じている職員が多いと感じた。

文科省の事業については、課題研究の内容を充実する形で実施されていた。これまでは作品作りが中心であったが、今年度からは生徒を前面に出し、生徒のやりたいことをうまく引き出して探究の活動につなげており、参考となるところが多かった。授業参観した際に、課題研究で実施するイベントの効果的な実施方法を、自分たちで解決しようと模索している姿がまさに探究活動だと感じた。

本校のフードプロジェクト部が実施している子ども食堂の取り組みについて、情報交換での交流を計画していく。

(4) 兵庫県立長田商業高等学校（コーディネーター）

① 実施報告

参加者：坂口コーディネーター

実施日：令和5年12月5日（火）15：00～17：30

内 容：長田商業の取り組み（高校生株式会社）

授業参観

意見交換

② 所感

長田商業の高校生株式会社 NAGAZON の設立アイデアは、前任校長からの引き継ぎであった。また、設立及びその後の予算確保のため、「三菱みらい財団」に助成金を申請して確保している。先行している指宿商業や岐阜商業、常陸大宮高校に視察に行ったことで、教員に意識の変化が見られたとのことであった。当初、半分近くの職員がこの活動について懐疑的であったが、3割程度の職員が積極的に活動を引き受けてくれ、学校全体の取り組みとしてスタートできていた。

ある程度の教員の賛同がなくては、大きな事業はうまくいかないため、やはり教員の意識改革は重要であると思った。授業参観で感じたことは、専門科教員も普通科教員も一緒

に取り組んでおり、生徒だけではなく教員にも一体感を生むメリットがあると思った。また、事業のコンセプトとして「生徒自身が実践する」を徹底されていて、生徒の実学の学びが実現できていた。

今後、本校で生産する生産物の販売を実施する形で交流を検討していく。

(5) 大分県立久住高原農業高等学校

① 実施報告

参加者：山田大地教諭、田中美沙都教諭

実施日：令和5年12月20日（水）13：00～16：00

内 容：学校概要

就農率22%（全国1位）

- ① 就農意欲を高めるためのカリキュラム
- ② 農業法人との連携

学力向上のための取り組み

- ① 朝の学習時間
- ② CORE ハイスクール・ネットワーク

くじゅうアグリ創世塾

- ① 充実した研修施設
- ② 充実した研修内容と管理・運営体制

② 所感

当校は探究的な学習の時間が充実しており、本校においても本事業で計画している「総合的な探究の時間」を活用することで、生徒が主体的かつ協働的に農業について学ぶ時間が必要であると強く感じた。特に印象に残ったのは農業法人との連携である。佐賀県は農業法人が少ないのが現状であるが、新規就農しやすい農業法人を進路開拓することは、関連産業への就職が少ない本校の課題を解決に導く方法かもしれない。本校の事業を深化させるためにも、探究活動における連携を計画したい。

当校では、CORE ハイスクール・ネットワーク制度を活用して大学進学に対応しうる学力の定着に取り組まれている。本校では、毎年大学進学者を輩出しているものの学力向上のための取り組みや、大学進学のための進路指導体制には課題が多い。習熟度別の授業をさらに細分化するなど、大学進学後に地域農業の核となるような人材の育成に取り組むべきであると感じた。

最後に、当校では全国から農業自営希望者を募集し育成するシステムを構築している。農業高校では農業自営希望者の減少が課題となっているが、その対策として、学校の枠を超えて、農業自営を目指す生徒同士の交流が必要であると考えられている。佐賀県の農業高校においては、平成26年度「未来さが農業塾」を立ち上げ、県内5校の農業系高校に在籍する生徒がこれを利用して研修及び交流事業を行っている。しかし、専用の研修施設は無く、実験・実習室が必要な場合は、県内の農業高校や県の農業関係機関の施設を借用している。また、研修内容の検討等は、農業部会担当校の教員が別の業務と並行して行っている。さらに県全体でも参加人数は例年40名程度である。そこで、当校との交流事業が

可能となれば、全国から集まる農業自営希望者との意見交換が可能となる。今後は本校の生物科学科の生徒を中心に、当校との交流事業の実現に向けて協議を重ねたい。

6 全国プラットフォーム事業研修会への参加

(1) 高校コーディネーター研修（第1回）

参加者：坂口コーディネーター、岩谷指導主事（管理機関）

実施日：令和5年6月27日（火）13：30～15：00（オンライン）

内 容：講義

- ① 事業全体概要
- ② コーディネーター研修
- ③ エコシステム研究会
- ④ PDCA サイクル構築
- ⑤ 高校魅力化評価システム

(2) 高校コーディネーター研修（第2回）

参加者：坂口コーディネーター

実施日：第1日目 令和5年7月13日（木）13：00～17：00

第2日目 令和5年7月14日（金） 9：00～12：00

場 所：島根県民会館

内 容：第1日目 ① 協働体制構築（体感ワーク、協働する方法）

② 先輩コーディネーターからの事例発表

第2日目 ① 課題設定と目標

② 課題解決と学習計画

③ 目標の共有

(3) 高校コーディネーター研修（第3回）

参加者：坂口コーディネーター

実施日：令和5年8月22日（火）14：30～16：30（オンライン）

内 容：講話 「コーディネーターの武器となる視点や考え方とは？」

講師 NPO 法人カタリバ・岩手県大槌高等学校コーディネーター
菅野 祐太 氏

- ① コーディネーターは何を目指して活動するのか。
- ② 社会に開かれた教育課程とは？
- ③ いま必要な高校改革について考える。
- ④ 高校改革の事例（岩手県立大槌高等学校）
- ⑤ コーディネーターが担うべき役割

(4) エコシステム研究会（第1回）

参加者：坂口コーディネーター

実施日：令和5年8月28日（月）13：00～15：00（オンライン）

内 容：講義

- ① 高校コーディネーターの概要（制度の仕組み）
- ② 愛媛県立三崎高等学校 石本 冴 氏（話題提供）
- ③ 熊本市立必由館高等学校 上野 正直 氏（話題提供）
- ④ 一般社団法人・教育魅力化プラットフォーム 田中 りえ 氏（話題提供）

(5) 普通科改革支援事業指定校発表会

参加者：坂口コーディネーター

実施日：令和5年9月22日（金）10：30～17：30

場 所：京都市立開建高等学校

内 容：京都府京都市立開建高等学校

- ① 成果発表会 20校
- ② 「総合的な探究の時間」授業見学
- ③ 意見交換

(6) 高校コーディネーター研修（第4回）

参加者：坂口コーディネーター

実施日：令和5年10月5日（木）14：30～16：30（オンライン）

内 容：テーマ「高校コーディネーターが知っておきたいカリキュラム・マネジメント」

- ① カリキュラムと教育課程
- ② カリキュラム・マネジメントの自己診断
- ③ カリキュラム・マネジメントのポイント

講師 大阪教育大学大学院連合教職実践研究科 教授 田村 知子 氏

(7) 高校コーディネーター研修（第5回）

参加者：坂口コーディネーター

実施日：令和5年11月21日（火）10：00～16：30

場 所：福島県立ふたば未来学園

内 容：テーマ「社会に開かれた教育課程を実現するための場づくりと生徒伴走」

- ① 学校ビジョンを実現するための場づくり、環境づくり
- ② 生徒伴走をメタ認知する（授業見学及びグループワーク）

講師 福島県立ふたば未来学園高等学校 教諭 林 裕文 氏
福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
学校支援統括コーディネーター
コラボ・スクール双葉みらいラボ拠点長 横山 和毅 氏

(8) エコシステム研究会（第2回）

参加者：坂口コーディネーター

実施日：令和5年12月15日（金）13：00～15：00（オンライン）

内 容：講義

- ① 高校コーディネーター全国実態調査結果の概要（速報値）
- ② 佐賀県教育委員会 細國 真紀 氏（話題提供）
- ③ 岩手県教育委員会 中田 裕治 氏（話題提供）
- ④ 広島市教育委員会 福山 亮 氏（話題提供）

(9) 高校コーディネーター研修（第6回）

参加者：坂口コーディネーター

実施日：令和5年12月11日（月）14：30～16：30（オンライン）

内 容：講話 「VUCA 社会に対応した持続可能な社会を創る」

講師 東京都市大学大学院環境情報学研究科
教授 佐藤 真久 氏

(10) 第3回高校コーディネーター研修

参加者：坂口コーディネーター

実施日：令和6年2月21日（水）13：00～17：00

内 容：講話 「リフレクションとは何か？」

講師 島根大学教育センター
准教授 中村 怜詞 氏

(11) 高校コーディネーター全国フォーラム

参加者：坂口コーディネーター

実施日：令和6年2月22日（木）13：00～17：00

内 容：講義

- ① 本事業の概要等報告
- ② 全国高校コーディネーター調査の結果
- ③ 高校コーディネーター資質能力について
- ④ 事例発表（分科会形式）高校コーディネーターの実践報告

V 次年度に向けて

1 令和5年度のまとめ

(1) 目的

- ① 文理融合型の学科・教科等横断による継続的な専門教育の実践
多様で幅広い視点に立ち学科・教科等を横断してそれぞれの専門性を活かした文理融合型の学びを実践するカリキュラム開発を行う。
- ② 地域資源を活用した「6次産業化」実践に対応できる人材育成
地域課題の解決に向けて能力を発揮できる「6次産業化人材」を育成する。
- ③ 多様化する進路ニーズに適応した学びへの対応
デジタル技術（遠隔・オンライン授業等）を活用して、外部専門家による質の高い教育の提供や生徒間の協働的な学びを時間的・空間的な制限を超えて実践する。

(2) 運営組織

外部有識者による組織と校内実践組織の両面からこの事業を推進する。

- ・外部有識者による運営委員（構想調書通り）
- ・校内運営委員（構想調書通り）
- ・カリキュラム開発委員会
各学年よりキャンパスごとに担当者を選出し、実施計画の情報共有を図り実施する。
なお、年間計画は校内運営委員会で策定する。
- ・調査研究
先進校視察によるカリキュラム開発に必要な情報収集や企業、大学との連携について調査研究を行う。両キャンパスより1名以上の職員を派遣し、文理（商業と農業）双方の視点から情報収集を行う。なお、客観的な視点でカリキュラムを構築するため、コーディネーターをはじめ、コンソーシアムや外部組織からなる運営委員の指導助言を活用しながら推進する。
- ・外部との連携
コーディネーターを活用し、外部人材や関連機関との連携を図る。

(3) 文理融合型カリキュラムの検討

3年間の目標と成果について仮説を立て、実践的なカリキュラムの検討に当たる。

- ① 1年生による交流授業
 - ・専門教科の学び合いにより、それぞれの学習内容を知ることや専門知識がどのように社会で役立つのかを知るきっかけにする。
 - ・互いに教え合うことで、教える内容を正しく理解することの必要性を実感する。
 - ・コミュニケーションを図るきっかけとする。
- ② 外部講師の導入
 - ・対象として同窓生や起業家、大学、関連産業検討
- ③ 合同課題研究発表会
 - ・専門教科の学び合いにより、それぞれの専門学習の深化につなげる。
 - ・外部に向けた発表の場を設けることで、表現力やコミュニケーション能力、伝達・発信

力を向上させる。

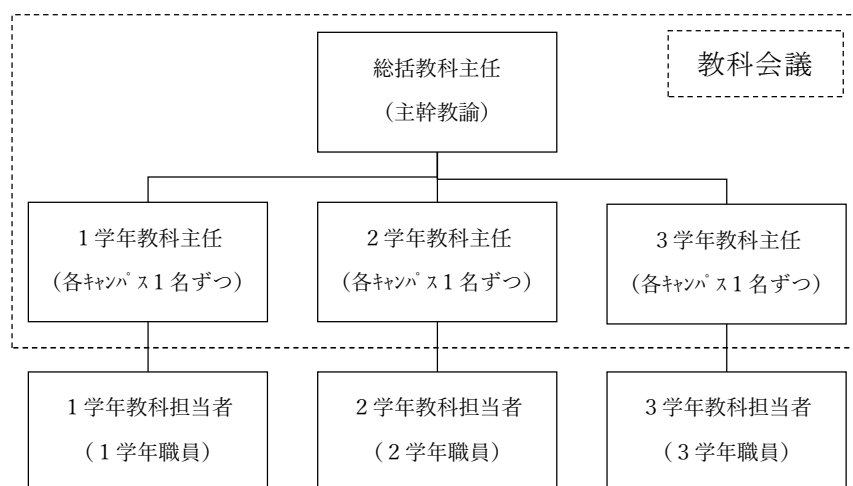
2 令和6年度についての検討

(1) 探究学習の導入の検討

- ・地域に根ざした県立高校の価値向上を目的とし、伊万里市の地域資源（陶磁器・歴史的建造物・伝統行事等）を組み合わせることで、1次産業品の付加価値向上に伴う1次産業従事者の所得向上・耕作放棄地の減少・後継者育成の他、観光促進や空き店舗対策等の身近な社会的課題の解決を目指す。
- ・地域に根ざしたビジネスや産業の現状と課題を知り、その解決方法には、商業や農業の専門教科はもちろん、基礎知識や関連知識の習得が必要であることを認識させる。このことを通して、どのようにして主体的に学べばよいか理解し、学びに向かう姿勢を養う。
- ・実施に際しては職員の負担軽減を図り、より有効な授業体系も併せて検討する。
- ・カリキュラムの自由度を図るため、令和6年度は、すでに設定したカリキュラムの変更を行わず、授業時間外に時間を確保し運用していく。
- ・学習計画と評価は『「総合的な探究の時間」の全体計画』、『「総合的な探究の時間」の年間計画』を参照。

※ 巻末「VI 補足資料」に掲載

- ・総合的な探究の時間は学年で指導を行う。そのため、各学年より総合的な探究の時間の学年教科主任を1名（各キャンパス1名ずつ）選出してもらい、主幹教諭を総括教科主任とした教科会議で指導計画を組み立てる。教科会議は定期（月1回程度）に教科会議は定期に実施する。



令和6年度「総合的な探究の時間」教科指導体制

(2) 令和7年度（事業指定最終年次）カリキュラムの検討

令和6年度に試行実施した「総合的な探究の時間」を参考として、カリキュラムへの導入を行う。

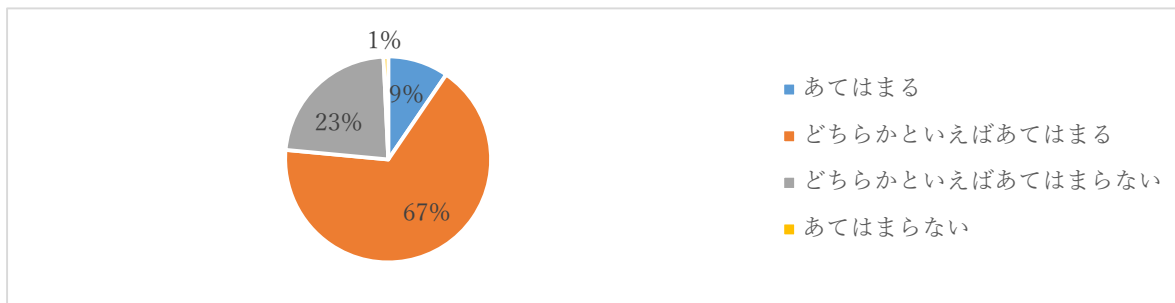
(3) 令和6年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムの開発	関係機関等との連携協力体制の構築
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・外部講師による講義（倉成氏） ・外部講師による講義（名村造船） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」教科会議 ・教員研修（事業説明）
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師による講義（重富氏） ・外部講師による講義（伊万里信用組合） ・外部講師による講義（グリーンファーム） ・外部講師による講義（IMARI） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」教科会議
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回運営指導委員会 ・外部講師による講義（松園氏） ・外部講師による講義（寶藏寺氏） ・外部講師による講義（久留米工業大学） ・外部講師による講義（OPTiM） ・外部講師による講義（佐賀大学） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」教科会議
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワーク（1学年） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」教科会議
8月		
9月		<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」教科会議
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・交流事業（キャンパス間） ・交流事業（五ヶ瀬中等教育学校） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」教科会議 ・第1回コンソーシアム会議（2年生中間発表）
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・指定校視察（糸島高校） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」教科会議 ・久留米工業大学特別講義
12月		<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」教科会議 ・第2回コンソーシアム会議（ポスター発表事前指導）
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・成果発表会 ・第2回運営指導委員会 	<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」教科会議
2月		<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」教科会議 ・第3回コンソーシアム会議（成果発表会）
3月		<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」教科会議

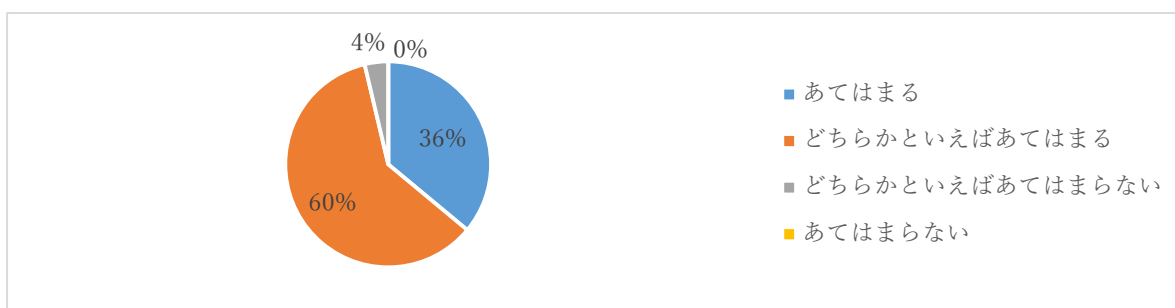
VI 補足資料

1 令和5年度1年生アンケート結果

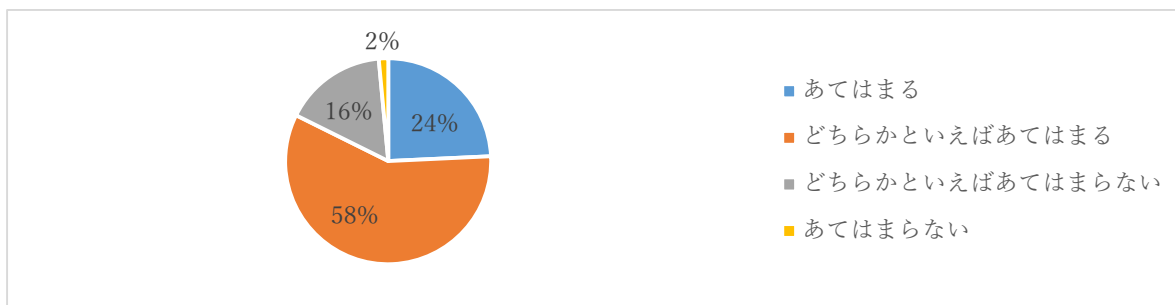
(1) 【課題発見・課題解決】様々なデータや資料から現状を分析し、問題を把握できる。



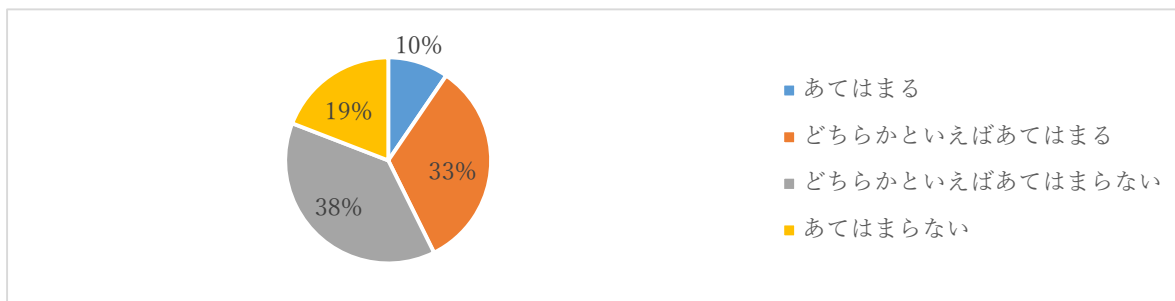
(2) 【他者との協働・コミュニケーション力】他者の考えを尊重し認めることができる。



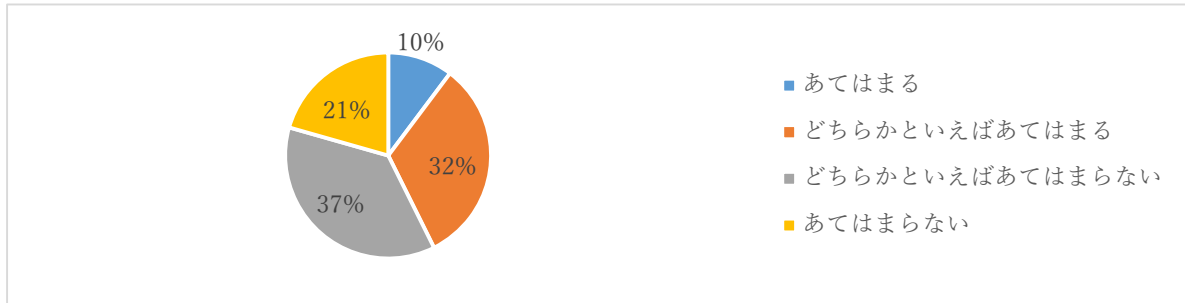
(3) 【他者との協働・コミュニケーション力】他者との意思疎通をスムーズに行うことができる。



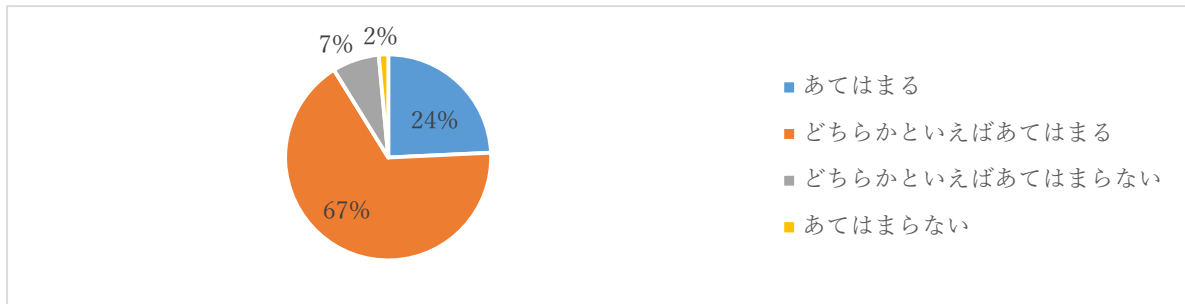
(4) 【リーダーシップ力】チームのリーダーとして率先して行動し、メンバーを統率することができる。



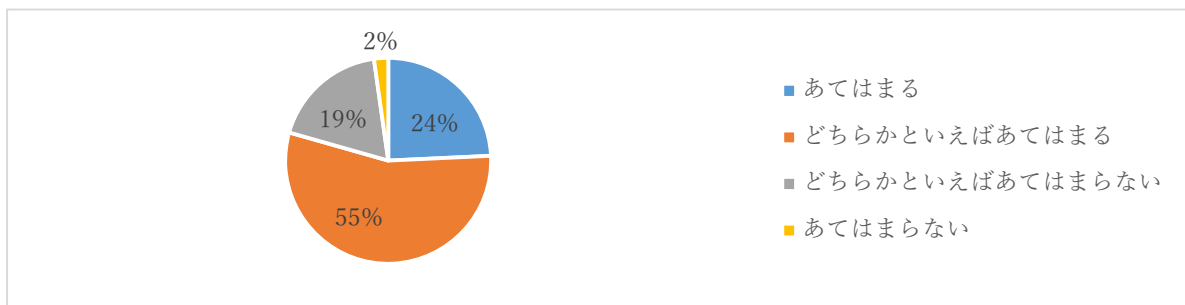
- (5) 【リーダーシップ力】チームのリーダーとしてメンバーのモチベーションを高めることができる。



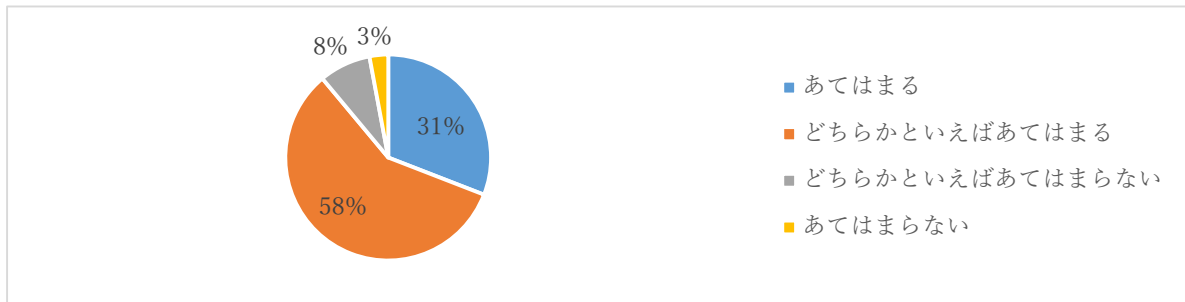
- (6) 【外部講師の効果】外部講師の授業・講義を通じて、新しい知識や視点を得ることができた。



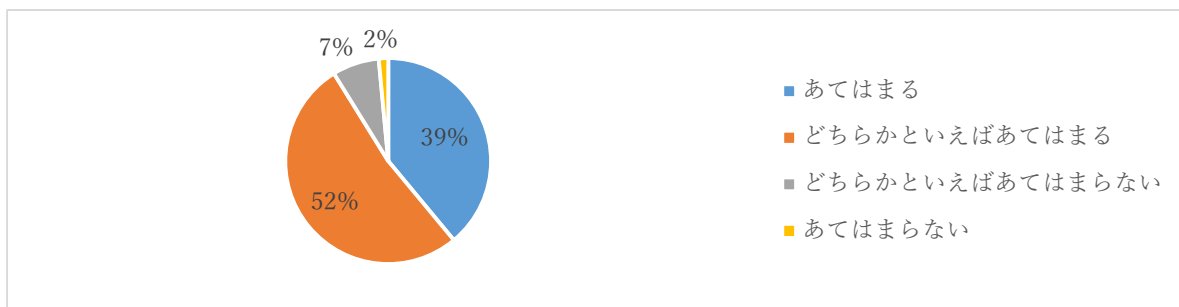
- (7) 【外部講師の効果】外部講師による授業・講義に参加することで、今後の学習や進路選択に良い影響があった。



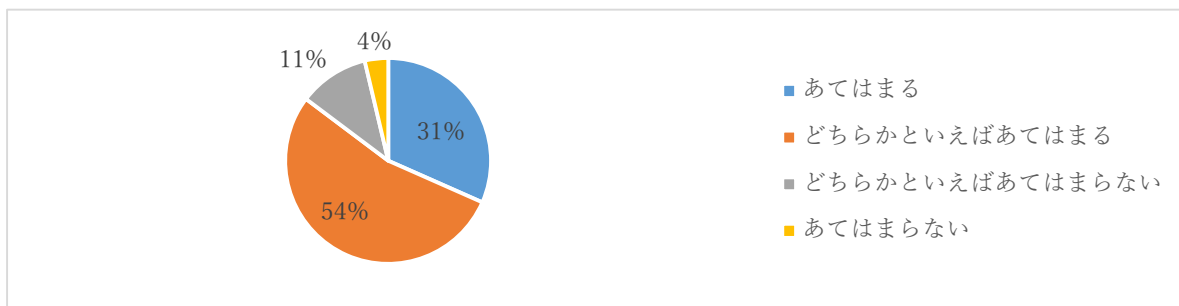
- (8) 【外部講師の効果】外部講師による授業・講義を今後も受けたいと思いますか。



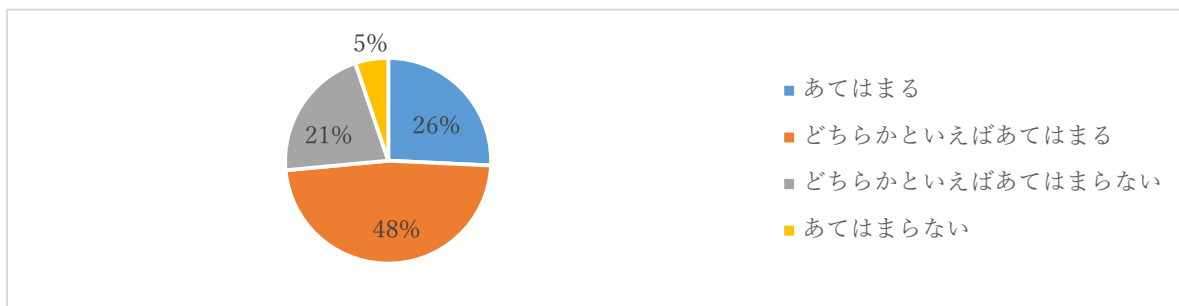
(9) 【その他】 この学校に入ってよかったと思う。



(10) 【その他】 学校で学習することで、自分ができることやしたいことが増えている。



(11) 【その他】 自分の将来について明るい希望を持っている。



【佐賀県立伊万里実業高等学校】文理融合型教育による「いまりん6次化」実践プログラム

目的

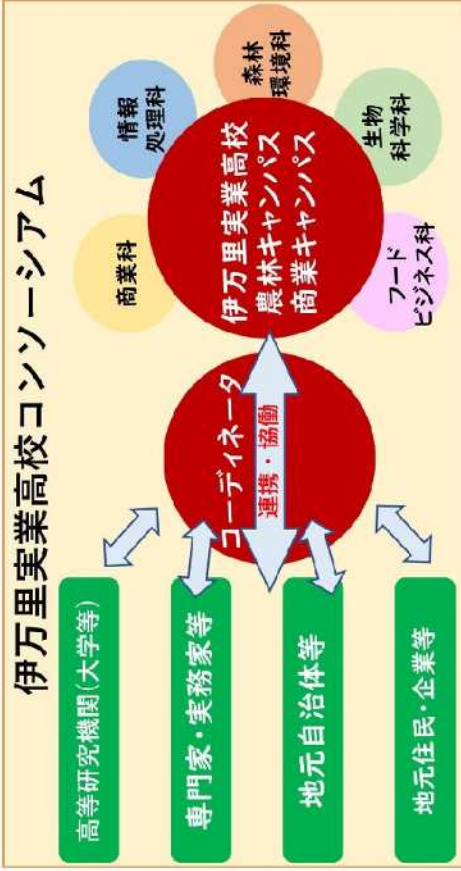
- 地域から求められる専門高校として、地域資源を活用した「6次産業化」を実践できる人材育成が必要
- 多様化する進路ニーズに適応した学びが必要

カリキュラム概要

6次産業化人材を育む文理融合型の学科・教科等横断による専門教育を推進する実業系高等学校の新しい教育モデルの確立と普及

新しい教育方法

学科の枠を超えた学び合いと外部講師の活用



令和5年度の目標

- 学科の枠を超えた学び合いを行うことで、多様な専門教科に興味・関心高めるとともに、高い専門性の融合による、多様な幅広い視野をもった課題を解決する人材を育成する。
- 外部講師を積極的に活用することで、学校の枠を超えた多様な幅広い視野をもった課題を解決する人材を育成する。

令和5年度の目標

- 【キャンパス間交流学習】「農業科」と「商業科」の生徒が互いに相手のキャンパスの学びを体験することで、それぞれの専門学習に興味関心を高める。
- 【課題研究発表会】農業及び商業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行う課題研究の成果を発表することによって、農業と商業を学んだ生徒同士の学び合いを目指す。
- 【ビジネスプランコンコース】外部講師を活用して生徒と地域社会との接点を増やし、生徒が提案するビジネスプランをとおして、地域社会に貢献できる人材教育を目指すことを目的に授業を開始した。



(図1) 商業科の生徒に簿記を教える様子



(図2) 農業科の生徒が商業科の生徒に測量を教える様子

成果と課題

- 互いの専門教科に対して興味・関心を高めることができた。しかし、課題研究では内容が「調査、研究、実験」とするのなか「作品製作等」とするのかが、農業と商業で捉え方が全く異なっていることがわかった。今後、「文」と「理」融合の手立てを模索し続けたい。
- 外部講師を活用した課題研究の取組「ビジネスプラン」の効果は大きかった。ビジネスプランの立案に関しても段階的に指導を受けることができ、内容の深いものが作成できた。

3 令和6年度「総合的な探究の時間」計画

(1) 全体計画

名称	(1年次) 探究学習「探究のはじまり」 (2年次) 探究学習「探究学習のすすめ」 (3年次) 探究学習「キャリア学習のすすめ」		
スクール・ミッション	「農」と「商」の学びを活かして、地域とともに歩み地域産業に貢献できる人材を育成します。 「農業」×「商業」⇒6次産業化		
目標	<p>地域活性化に向けて地域産業界のリーダーとして課題を解決するために必要な資質・能力を以下のように設定する。3年間の探究的な活動を通して、これらの資質・能力の育成を目指す。</p> <p>(1)『知識及び技能』に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 専門的知識 … 農業や商業の専門教科について、その原理・原則を理解することができる。 ○ 地域産業、幅広い産業への理解 … 地域や日本、世界の産業事情を理解することができる。 ○ 課題発見力 … 産業事情の背景を理解し、農業及び商業の専門的な視点から課題を発見することができる。 ○ 情報収集・活用 … 探究活動に必要な情報を収集し、それを適切に活用することができる。 ○ 実験や調査の技能 … 探究活動に関する実験や調査を計画し、適切に実行することができる。 ○ ICT利活用 … ICTを適切に活用し、探究活動を効果的に進めることができる。 <p>(2)『思考力、判断力、表現力』に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 論理的思考力 … 探究活動の内容を体系的に整理し、筋道を立てて考えることができる。 ○ 多面的思考力 … 他者の意見や異なった視点からの考えを取り入れ、自らの探究活動に生かすことができる。 ○ 課題解決力 … 課題の原因を分析して効果的な解決策を考えるとともに、それを実行に移すことができる。 ○ 伝達・発信 … 探究活動について他者に効果的に伝えるとともに、様々な発信方法を考えることができる。 <p>(3)『主体的に学ぶ力』に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 関心・意欲 … 多くの産業課題に対して、課題解決に向けて意欲的に取り組むことができる。 ○ 主体性 … 探究活動において自ら考え、責任を持って行動することができる。 ○ 他者と協働する力 … 協働的な学びを通して、多様な情報を共有し、異なる視点からも考察することができる。 ○ 地域愛 … 地域の魅力をよく理解し、よりよい地域の創造に向けて貢献しようとする態度を身に付ける。 		
	1年(1)単位	2年(1)単位	3年(1)単位
学習内容	地域の魅力に目を向け、個人探究活動に取り組もう ～探究活動に必要となる基礎的な力の育成～	地域の魅力を強化するための課題を知り、グループ型探究活動に取り組もう ～地域の魅力強化のための課題発見力の育成～	地域産業界の魅力に気づき、キャリア教育の個人探究活動に取り組もう ～地域産業界の魅力に気づくキャリア教育力の育成～

<p>学年目標</p>	<p>地域の魅力について、フィールドワークや調査による探究活動に取り組み、地域の魅力強化のための課題を発見する。また、課題発見や課題解決の手法、論理的思考力や多面的思考力など、探究活動に必須となる基礎的な力の育成を目指すとともに、発表会を通して研究内容を他者に効果的に伝える方法を身に付ける。さらに、地域を愛し、地域に貢献しようとする態度を醸成する。</p>	<p>グループで設定した地域の魅力強化のための課題について、フィールドワークや調査などの探究活動に取り組み、その解決方法を探る課題解決力を身に付ける。また、1年次に育成された、課題発見や課題解決の手法、論理的思考力や多面的思考力など、探究活動に必須となる基礎的な力のさらなる向上を目指す。さらに、多面的で広い視野を持ち、地域を愛し、地域に貢献しようとする態度を醸成する。</p>	<p>地域産業界について、講話や調査による探究活動に取り組み、地域産業界の魅力に気づくことができるキャリア力を身に付ける。また、地域産業界を活性化するリーダーとしての素養として、課題発見や課題解決の手法、論理的思考力や多面的思考力などの力の育成を目指す。さらに、多様な価値観を持ち、地域を愛し、地域に貢献しようとする態度を醸成する。</p>
<p>知識・技能</p>	<p>①農業や商業の専門教科について、その原理・原則を正しく理解している。地域や日本、世界の産業事情と周囲に与える影響について理解している。 ②探究活動に必要な実験・調査を計画し、適切に実行している。また、ICT等を適切に活用し、必要となる情報を正確に収集して活用している。 ③産業事情の背景を理解するとともに、自己の探究活動が地域の活性化につながることを理解している。</p>	<p>①農業や商業の専門教科について、その原理・原則を正しく理解している。地域や日本、世界の産業事情と周囲に与える影響について理解している。 ②探究活動に必要な実験・調査を計画し、適切に実行している。また、ICT等を適切に活用し、必要となる情報を正確に収集して活用している。 ③産業事情の背景を理解するとともに、自己の探究活動が地域の活性化につながることを理解している。</p>	<p>①地域産業の魅力に気づき、キャリア教育の重要性を正しく理解している。地域産業が地域や日本、世界に与える影響について理解している。 ②探究活動に必要な実験・調査を計画し、適切に実行している。また、ICT等を適切に活用し、必要となる情報を正確に収集して活用している。 ③産業事情の背景を理解するとともに、自己の探究活動が地域の活性化につながることを理解している。</p>
<p>思考・判断・表現</p>	<p>①講演・講義やフィールドワーク、調べ学習を通して、地域活性化に向けた適切な課題を設定している。 ②フィールドワークや実験・調査、ICT等を活用して、探究活動に必要な情報を収集している。 ③探究活動について、その内容を体系的に整理するとともに、多面的な視点から分析している。 ④自己の探究活動について、分かりやすくポスターにまとめるとともに、他者に効果的に伝えている。</p>	<p>①専門教科に関わる学習を通して、地域活性化に向けた適切なテーマ設定をしている。 ②フィールドワークや実験・調査、ICT等を活用して、探究活動に必要な情報を収集している。 ③探究活動について、その内容を体系的に整理するとともに、多面的な視点から分析している。 ④自己の探究活動について、分かりやすくスライド等にまとめるとともに、他者に効果的に伝えている。</p>	<p>①地域産業の魅力に気づき、自らのキャリア力の向上に取り組んでいる。 ②講話や調査、ICT等を活用して、探究活動に必要な情報を収集している。 ③探究活動について、その内容を体系的に整理するとともに、多面的な視点から分析している。 ④自己の探究活動について、分かりやすく要旨としてまとめるとともに、他者に効果的に伝えている。</p>

<p>主体的に学習に取り組む態度</p>	<p>①他者の意見や異なった視点からの考えを取り入れ、自己の探究活動に生かしている。</p> <p>②探究活動を自ら計画し、責任を持って行動するとともに、協働的な活動を通して、多様な情報を共有し、異なる視点を取り入れている。</p> <p>③多くの産業課題に対して意識を持つとともに、地域の魅力をよく理解し、地域に貢献しようとする態度を身に付けている。</p>	<p>①他者の意見や異なった視点からの考えを取り入れ、自己の探究活動に生かしている。</p> <p>②探究活動をグループで協力して計画し、各自が責任を持って行動するとともに、協働的な活動を通して、多様な情報を共有し、異なる視点を取り入れている。</p> <p>③多くの産業課題に対して意識を持つとともに、地域の魅力をよく理解し、地域に貢献しようとする態度を身に付けている。</p>	<p>①他者の意見や異なった視点からの考えを取り入れ、自己の探究活動に生かしている。</p> <p>②探究活動を自ら計画し、責任を持って行動するとともに、協働的な活動を通して、多様な情報を共有し、異なる視点を取り入れている。</p> <p>③多くの産業課題に対して意識を持つとともに、地域の魅力をよく理解し、地域に貢献しようとする態度を身に付けている。</p>
<p>教科横断的な学び、地域との連携、指導方法や指導体制の工夫等</p>			
<p>○農業や商業の専門教科の学習内容と関連付け、探究的な学習を進める。</p> <p>○「総合的な探究の時間」で育成を目指す資質・能力を全職員で情報共有し、各教科で育成する資質・能力と関連付けて探究的な学習を進める。</p> <p>○企業、行政機関（佐賀県、伊万里市など）、教育機関（佐賀大学、久留米工業大学など）とコンソーシアムを構成し、講演会、講義、大学院生によるサポート、フィールドワークなどを実施する。</p> <p>○3年間を通して、統一したルーブリック表による評価を行う。これにより、目指すべき生徒像の具象化、生徒一人ひとりの能力の把握、生徒の変容の客観的な分析が可能となる。</p>			

(2) 年間計画

学年	1 年	年間実施見込時数	3 5 時間		
テーマ・単元 (時数)	ねらい・学習活動	観点・規準			評価方法
		知	思	態	
1 探究活動の目的や手法など、基本的な内容について学ぼう。 (10)	<ul style="list-style-type: none"> 「いまりん6次化」プログラムについて説明を聞き、これから探究活動に取り組んでどのような力を身につけるかの理解を深める。 探究活動の目的について確認するとともに、基本的なステップや手法について理解する。 	③			<ul style="list-style-type: none"> 探究の記録 行動観察 発言
	<ul style="list-style-type: none"> 地域産業の現状や課題について、講演会や講義を通して理解する。 講演会を通して地域活性化について理解するとともに、自分の住んでいる地域の魅力化に向けて課題を見つける。 	①		③	<ul style="list-style-type: none"> 講演会の記録 行動観察 発言
2 地域の魅力強化に向けて探究テーマを決めていこう。(13)	<ul style="list-style-type: none"> これまでの学び(他教科も含む)の中から地域の魅力強化に向けた探究テーマを決め、リサーチクエスチョンを設定する。 		①		<ul style="list-style-type: none"> 探究の記録 探究計画書 行動観察 発言
	<ul style="list-style-type: none"> 探究活動に必要な調査(フィールドワーク)を計画し、長期休業中などを利用して実施する。 	②	②		<ul style="list-style-type: none"> 研究の記録(調査、実験) 行動観察(調査、実験の様子)
3 探究のテーマ設定の理由についてまとめ、他者に向けて発信しよう。(12)	<ul style="list-style-type: none"> 決定した探究テーマをについて、テーマ設定の理由をまとめる。 プレゼンテーションソフトなどを使って、テーマ設定の理由についてまとめ、発表会を行う。 		③	①	<ul style="list-style-type: none"> 研究の記録 発表資料(プレゼンデータ) 発表、質疑応答(発表会) 行動観察
	<ul style="list-style-type: none"> 発表会で得られた意見などを参考に、再調査や検証を行ってテーマ設定の理由を修正する。 テーマ設定の理由をポスターにまとめ、発表する。 		④	②	<ul style="list-style-type: none"> 研究の記録 発表資料(ポスター、原稿) 発表、質疑応答(発表会) 行動観察

学年	2 年	年間実施見込時数	3 5 時間		
テーマ・単元 (時数)	ねらい・学習活動	観点・規準			評価方法
		知	思	態	
1 地域の魅力強化に向けたテーマを決め、計画に従って探究活動を進めていこう。(10)	・先行研究や事例から仮説を立てる。また、探究活動を進めるための手法について検証し、今後の計画を立てる。	③			・探究の記録 ・探究計画書 ・行動観察 ・発言
	・地域産業の現状や課題について、講演会や講義を通して理解する。 ・講演会を通して地域活性化について理解するとともに、自分の住んでいる地域の魅力化に向けて課題を見つける。	①		③	・講演会の記録 ・行動観察 ・発言
2 地域の魅力強化に向けたテーマを決め、計画に従って探究活動を進めていこう。(13)	・行った調査、実験の結果を分析し、考察を行って研究の結論を導く。		①		・研究の記録 ・研究計画書 ・行動観察 ・発言
	・探究活動に必要な調査（フィールドワーク）や実験（実習）を計画し、長期休業中などを利用して実施する。	②	②		・研究の記録（調査、実験） ・行動観察（調査、実験の様子）
3 研究内容についてまとめ、他者に向けて発信しよう。(12)	・プレゼンテーションソフトなどを使って、研究内容についてまとめ、学年発表会を行う。		③	①	・研究の記録 ・発表資料（プレゼンデータ） ・発表、質疑応答（発表会） ・行動観察
	・発表会で得られた意見などを参考に、発表資料を修正する。 ・プレゼンテーションソフトなどを使って、研究内容をポスターにまとめ、全体発表会を行う。		④	②	・研究の記録 ・発表資料（プレゼンデータ） ・発表、質疑応答（発表会） ・行動観察

学年	3 年	年間実施見込時数	3 5 時間		
テーマ・単元 (時数)	ねらい・学習活動	観点・規準			評価方法
		知	思	態	
1 地域産業の魅力に気づき、キャリア教育活動を進めていこう。 (10)	・企業が求める人材像を理解して自己PRを作成する。	③	①		・自己PR ・行動観察 ・発言
	・地域産業の現状や課題について、講演会や講義を通して理解する。 ・講演会を通して地域活性化について理解するとともに、自分の住んでいる地域の魅力化に向けて課題を見つける。	①		③	・講演会の記録 ・行動観察 ・発言
2 社会人として必要な知識及び技能と思考力、判断力、表現力を身につけていこう。 (13)	・発表会に参加し、発表内容の指導助言を行い、社会人として必要な思考力、判断力、表現力を身に付ける。		①		・指導助言の記録 ・行動観察 ・発言
	・社会人として必要な知識や技術について、講演会や講義を通して理解する。	①		③	・講演会の記録 ・行動観察 ・発言
3 研究内容についてまとめ、他者に向けて発信しよう。(12)	・プレゼンテーションソフトなどを使って、研究内容についてまとめ、全体発表会を行う。		③	①	・研究の記録 ・発表資料(プレゼンデータ) ・発表、質疑応答(発表会) ・行動観察

文部科学省指定事業

令和5年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業（創造的教育方法実践プログラム）」
文理融合型教育による「いまりん6次化」実践プログラム（第1年次）

発行年月 令和6年3月

発行 佐賀県立伊万里実業高等学校

E-mail imarijitsugyoukoku@education.saga.jp

U R L <https://www.education.saga.jp/imarijitsugyoukoku>

【農林キャンパス】

〒 848-0035

伊万里市二里町大里乙 1414 番地

TEL 0955-23-4138(代)

FAX 0955-20-1002

【商業キャンパス】

〒 848-0028

伊万里市脇田町 1376 番地

TEL 0955-23-5191(代)

FAX 0955-20-1004



Dynamic
Challenge